

二

皆一揃の扮装は、股引向はぎ、草鞋がけで、風を受ける憂があるから、前へまはして合羽を被た、向脛へ雪を浴びて、眉毛にも、頭髮にも雪片を被りながら、筵で織つた肩當して、一人一人二三十貫もあらうといふ荷を背負つて居る。會社の運送荷物で、冬日は敦賀から、海上、船が利かないので、三國、福井、乃至加賀、越中地方へ行くのを陸で山越に運搬する、渠等は宿次の荷擔である。

一條道の雪の中を一行にならんで、互に矢聲をかけながら、大呼吸の汗みどろで、流をさかのほるやうに推して來たが、あたりに飛々の休茶屋の、彼方へ二人、此方へ三人、おもひくりに列をぬけて、あとに残つたのがどやくと此婆さんの茶屋へ入つた。

敷居を跨ぐとはつといふ呼吸をついて、一同が草鞋にかぶさつた雪を踏落し、顛巻を取つて肩の雪を拂ふのもあれば、顔の汗を拭ふのもあり、仰向いて水鼻を吸るのものもある。

「やあ、ようござつた。」と婆さんは早速に聲を懸ける。

「あゝ、やれ〜。」と三人が三人同一やうなことをいつて、前後に腰を懸けた。

「いかいこと降ることつた、なあ婆さん。」

「御太儀様ぢや、はい、なか〜止みさうにもござらぬ。」

「や、やも此様子で積つたら時の間に山留ぢやらうて、なあ、」と一人を見返る。

「まづ、何ぢやの、四五日経たぬでは、あとの組は出て來まいかい。」と突出して手を烘る。婆さんは肩を擧めて、

「それでは多日逢はれましねえか。」

「然うよ。」と茶釜の茶を汲み出しながら一人がいつた。

「へッほこな若い奴等、十二層まで此方人等と一組に來たのでせえ、峠の雪を見て彼處で居寤んでしまやあがつた、一步も踏出し得ない、此彼は何のといふ、元氣でやつて來たが、何うしてなか〜なこつた、近來にねえよ、此方人等も武生で此荷物を下ろしたら逗留だ。やもう、

ほつとした、あてこともねえ。」

「あゝ、こいつを卸してゆつくりと欠伸がしてえな。」

「卸してゆつくりと休まつしやいまし。」と婆さんは火箸で枯枝を交ぜ返へすと、ばつと灰が立つたのを、一人が手拭でおさへながら、

「うんにや卸して休むとせえ、もう一步も行けるのぢやあねえ。これから見ると潜水夫といふ奴の方が増だぜなあ。何のそれ盤石を抱いて淵へとやら。だが、重量をつけて沈むのだから仔細はなからう、分のないこつたい。此方は重荷を背負つて山へ上るのだから堪らねえ。」

「そこでよ。」とまたいひかゝる處へ、納戸から一人手探りで、白い眼で天井を仰ぎながら出て来た盲人があるので、いひ合はせたやうに黙つて皆が見た。

肩のしよほけた、顔色の蒼い、白痘痕で、面長な、五分刈の伸びた瘦せた、盲人で、ござつぱりした綿入の上へ黒のけんちゆう、紋なしの羽織を着て、小倉の帯を占めたのがよほくと出て來ると、早や土間へ足を下ろした。ちやうど草鞋が片寄せてあるのを猶豫はす直に取つて

片足をあてがつたから、荷擔夫どもは驚いた。然るに、婆さんは心得たもので、

「それでは發足つしやるかの。」とちと身體をつらしたばかり、槽にあたつたまゝ落着いた風で聲をかける。絶えず仰向いて居るのが軽くうつむいて、

「はい、お世話になりました」

と手早く草鞋を結んで兩足を揃へた、盲人は悠々として襟を合せる。

三

手荷物も何にもない小包一個持つては居らず、此雪に盲人の單身で、然も吳産も着ず、合羽も着ず、今草鞋を穿いて仕舞うと、蝙蝠傘を一本杖にして、其まゝ身を起さうとするのを見て、荷擔夫の一人、堪へかねて聲を懸けた。

「や、按摩さんお前は、」

「何處へ發つて行かうといふのだ、」と他の一人は婆さんにいつた。

盲人は別に答なかつたが、婆さんは頷いて、

「何じや、大良まで行かつしやるのじや、」

「え、え、大良へ行くえ。かう、途方もねえ、此雪じやお前氣の利いた奴は獸でもうつかり歩行かねえぜ。」

「いきなり氷になつちまわあ。」

「今、これお前が出かけた日にや、此方人等の歸る時分にや、かすがの峠に座頭の亡念が出るといふ風説をすらあ。」

「いやまた其時はお目に懸りますかいかい。」

盲人は聞いてニヤ／＼と笑つたばかり、氣に懸けた様子もない。

荷擔夫はいひ加へて、

「そりや何、お前盲人で川を渡るのもあるから、斷つて峠を越せねえといふ次第もなからうけれど、吳産一ツ着ねえでお前、此雪に何うするもんだの。」

「難有う存じます。」とばかりいつたが、落着いて立上つて、縮入の裾を掴み上げると、生白い瘦せた足が出る、しよたく／＼とだらしない風、杖を取つてしよんほりとイんだ。

「よう、これ其風で行かれるもんか。」

「なに、いゝえ、」といひざまに振返つて、顔を傾けて、

「婆さん、お世話でした。」

「ござらつしやるかの。」

づか／＼と檐下へ出ると、鶏が羽ばたきたらう、駕籠にぼつさりと音がしたので、仰いで見た。額へばら／＼と雪がかゝつた。盲人は立停まつて考えたが、

「小降じや。」といつて淋しく笑つた。

「おゝ、小降になつた。」と婆さんは首途を祝するが如く勢よくいふ。

盲人は蝙蝠傘をさし脇挟んで、杖を突立てたが、敷居を跨いで峠へ出た。

「ふむ、」と三人は嘲るやうに呟いたが、呆れた顔で見送ると、盲人は隧道の方を指してとほと

ほとあるいて行く。雪は小留むで、風が風ぎた。綿に包まれたやうな山の巔が波頭のやうになつてはツきり見える。向の茶店に火を焚くのであらう。青い煙が一團火の形をして眞白な戸外へ出た。

撫肩の悄乎した、黒羽織に紋の無い、首の細い盲人の首垂れた其後姿は、淋しく細道に向ふへ遙かになつたが、終に雪の下になつて見えなくなつた。

隧道の巨なる黒い口はバクリとして天の一方にあいて居る。

「命知らずめ。」

「様あ見ろよ、今にまた。しかし可哀想に。」

「いや婆さん、お前といふものもまた何だつて見放してたゝしたのだ。」

「何處のものだの。」と口々に荷擔夫は問ひ懸ける。

婆さんは幾度も頷いて、

「そりやも、いはねえでものこんでござらあ。昨夜内に泊らつしやつて、翌日は大良へ發つと

いはつしやるの。雪はふるなり、お前方のいはつしやるより、もつともつと此の愚痴つほい婆々の口で、いやになるほど留めましたが、何の雪も合羽もない、袖のあるものは樹の枝に引かゝる道理じや、裸身で轉がり落ちてなりと、行く處へ行かいはと、何かハヤ一心のことがあると見えるもの。佛様がござらつしやる。それまでに思ふものを、何か知らぬが棄てさつしやるまい、お助けなされうと思ふたで、快くたゞせましたが、なんまいだくく。」と口の中で念佛を唱へたまゝ婆さんは黙つてしまつた。

「いや、裸身で轉け落ちるは豪いな、何うだ、やい。」

「むゝ、其氣で出懸けろ。」

「どれ、」と一齊に背負つた荷をゆり直した。手にくゝ鬚卷を扱きながら、

「や、婆さま。」

「いじやござれた。」

「どつこいしよ。」と呼吸を入れて皆立つた、あとには薬屑が散らばつて、背の荷物から落した

雪が爐の火で溶けたので斑々として土間を濡らした。

婆さんは彼の大火箸で、樹の枝、枯葉を四隅から灰の中へ掻き寄せながら、うつむいて眼を眠つて、

「なんまいだ、なんまいだ、なんまいだ。」とぶつ／＼唱へる。

四

「先生、荷擔夫ががす、道を除けておやんなされ。的等は重荷を背負てますで、路傍のぶわぶわ雪に踏込むぢやあ、足を抜いて取ることを爲得ませぬ。いや、また雪路はこれも難儀でがすよ。」

けんどもこの模様じやあ、もう二番手の續くこつちやあござりませぬで、峠を越すまでは逢ひますまい。また荷擔夫ばかりじやござりませぬ。多日往來は途絶えましやうか、はい／＼、嶮い何のツて、こりや木の芽峠、板の木峠などいふ、命がけの奴と多分には違ひませぬ。

北國から上洛へ出やうといふには冬の關所でござります。

地體平生はこれでも道幅が一間の餘もあります。谷底の樹の下では鶯と時鳥が一時に囀いて居て、夏なんざ結構な處でござがね、もそりや來た雪、といふが最後此通、それ見上げるとおつかぶさるやうな巔邊から何千丈といふ谷底まで、瀧が落つるやうな一なだれの雪で、樹も山も何もあつたもんぢやござりませぬ。これで、先生、此方人等は樹の梢をかうやつて歩行いて居るのでござりますわ。大かい雪のかたまりへぐる／＼巻に糸をつけたやうな細い道じや、宛然綱渡りといふもんでがす。

こりやまあ餘程下腹を落着かせぬと眼がまひます。それで足がこそばゆくなつて天窓がふら／＼すりや、一本橋を踏外すわけで、ころ／＼。は／＼は／＼、其がね、馴でござ。此處へまた馬を引張つて來やうといふ恐ろしい人間がござりますじや。え、落、落ちますとも、落ちますとも。よく横倒れに馬がなだれます。ありうちのことで、これでないともまた狼物が餌食にありつかれませぬで困るでがすて。

は、はい、何、狼、狼物かね、出ます、出ますとも。何、恐いの恐かねえのたつて、そりや先様より此親仁が空腹じや。いやまた其時のまづいものなし、何でもござれ取つて喰ひたいといふ、こんな厄介な人間にかゝつちやあ、彼奴がまた恫怯でな、傍あたりへ寄付くものじやござりませぬ。

何でもものが恐いの、腹の張つた時と金子のある時に限りまするわ。あゝ、我あ懐中に満とあるが、取られやうか、盗られやうかとはつく／＼思つてると、此奴が手もなくやられますか。初手からまた盗られまい／＼と怯氣々々した日には指一本さはられぬ前、ハヤ盗られても同一で、どつち道無い奴が呑氣でござがね、また懐に持つて居ても、えゝ！盗つてやらう、持つてさうな奴が見えたら搦んでやらうと、盗眼で歩いて見ますか、此奴盗られつこなしの一番、大丈夫なもので、つまり盗賊の用心には手前でさきに盗賊になるのでござ。はゝゝゝはゝゝ、いやよく唾舌りますわ、これでまた一杯とあふつて御覽じまし、雪の中へ寢轉んで、寢言さへいひかねませぬ、はゝゝゝはゝゝゝ、さあまづ峠へ着きました。一時ゆつくりりと休まつせえまし。

おい、婆さまや。」と先へ立つた、籐編の向腰に沓懸草鞋、足袋なしの跣足で、大きな足をやつとこさと上げてのさりと入る。頬冠をして笠は着ないで、石田縞の綿入の上へ手輕う豊島吳産を引懸けた、しやんとした造つけのやうな武骨な親仁。片手を懐つたまゝ片手にはいま火の消えた提灯をぶらりと提けて居るが、其まゝ、ナアござれナアなんどゝ鼻唄でもやりかねさうにない、達者もので、これは武生あたりから朝疾く出る道案内。

急に雪が来て一晩に積つた時、早立の客は地の理を知らないのに、粉雪が風に吹まはされて、小さな池の上も、用水も、小川の堰も、田の上も、唯凸凹のない雪の原になるので、づばと穴を踏みあけて水に落つこちなどしないやう、宿から心着けて先立たせる。此峠まで先達となり、萬夫を越す處まで見送つて、ぶらりと歸ることになつて居る。

五

「おゝ、御苦勞様じや、さあゝ／＼と寄つてあたりつしやれ。」

「はいく。」といつて道案内の親仁は、自分先づ腰を懸けたが振向いた。

「さあ、先生、休まつせえまし、婆さん、どつさりと焚いてあけてくれ。」と微笑でいふもてなしぶり。無言ですつと入つたのは中背の洋服姿、すつくを堅く占めて靴を穿いた、外套を着て深々と帽を被つた、眞黒な締つた扮装、身輕に結束をした旅客である。

雪だらけのまゝ親仁の向ふへ、婆さんの隣へ、腰掛を跨いで入つて、いま焚着けた炎ささへ手袋のまゝ兩手を翳した。其歩を移すのも、腰を懸けたのも、爐の火に手をば翳したのも、心あつてするのではないやうな、無心の狀で、別に深く何等か思ふ處があるらしい。其一舉動はすべて此旅客に取つては、ほんの、纒かに、輕少な、些細なことであるらしい。旅客は深い帽子の中から外の方を眺めながら、

に「茶をおくれ。」といつた。

一體、飲を求むるとか、暖を要するとかいふ、手足や口についてのこと、たとへば主義意見などに必要のない、即ち此親仁や、婆さんに對してもものをいふ其口数は極めて少ない、言は簡

單なものであるが、しかし注意せぬ、無雜作な、其舉動たるや、頗る輕快なものであつた。

「はいく。」といつて、婆さんは茶碗を取ると、案内者の親仁に手近にあつた茶柄杓を取つて、

「こゝへ出さつしやい汲んであげう。」

と茶碗を婆さんから取つて親仁はまめ／＼しく茶釜の蓋を外して、持直して突込む茶柄杓が釜の底へトンとあたつて、金の蓋がカチリと鳴つた。槽は焚え立つて其時ばう／＼と音がする。旅客の黒い外套のやゝ濡色を帯びたのが火のあかりで、赤らんだ。

婆さんは右瞻左瞻ながら、

「何處までござらつしやるの。」

打つけには威儀ある人に失禮とでも思つたか、かういつて婆さんは親仁を見る。

「敦賀までお急ぎじや。」

「やれ、お年少ながお一人で、それは御太儀でござらつしやるの。」

旅客は會釋をしたのであらう、ちよいとうつむいた。婆さんはほく／＼した顔色で、

「矢張御修行に行かつしやるのか。」

親仁は傍から引取つて、

「いんにや、すつとお役人、それ、婆さんお前も聞いてるじやらう。今度敦賀から福井へかゝる鐵道の、アノお係りで。えゝ、武生のお宿で何とやらいひましたわ、其、何、技師とやら、なう先生。」

「むゝ、出懸けやうな。」といった、片手で茶代を置くと、其まゝ肅として立つた。兩手を懐へ入れたが衝と腰懸を跨いで出る。

婆さんは口早に、

「まあ、旦那様、」

「さあ、お急ぎが宜からうて、そんなら行かしやりますか。」

「御苦勞。」

「はい〜。」

と勞らはれたのを喜ぶ状で、いそ〜とへついて出る。こゝまでは先導で、親仁の役目は済んだのだけれど、あとは實體ものゝ見送るつもり。

此時また一しきりサラ〜と降出して、ぱつくり開いて居た高い處の隧道の口は、紛々たる雪片のなかに明滅する。

前途をキツと仰いで見て、技師はまつすぐに立つた。親仁はまた振返つていま来たかすがの麓の方、技師とは反對に其足許を瞰下ろした。

峠から谷の眞底まで、一かたまりの雪になつて、唯この二人は凄まじい一個絶大なる雪まろけの上に立つてるので、山の鼻、山の懐に、斷續して一條糸のやうに通つて居る、雪の細道の遙かに眼の届く谷間あたりが、此時吹雪たつて颯と粉雪を吹き上げたが、宛然鐵瓶の口から湯気が立つたやうに、處々ぶす〜となだらかな雪の面へ湧きあがる。

峠一座はソヨとの風も吹かず、ほたく〜と大きな雪が降りしきる森とした耳元に、ケケケツケーと鶏が啼いたが、山から山、山から山へ響き渡つた。

親仁は更に麓を見た、寸人豆馬三四人、中に挟んだ黒いものは、一挺の駕籠であるが、いま其吹雪を潜つて出た。

「隧道は？」と不意に聞いた、むかふむきの投師の聲に、親仁は慌しく腰を屈めて、

「この前途でござります。」

六

「何うなされました先生、先生何うしなされたのでござります。」

背後に従へた親仁に怪まれながら、技師は隧道の口へ立停まつて、一步も進みさうにない。彼の手を兩もと衣兜にいれたまゝ、肩を張つて、眞向に隧道に面し、冷い、暗い、湿い、山腹を穿つた煉瓦疊の巨大な洞穴の中を透かしながら、

「何時造つた、この萬夫はいつ出来た知らないか。」と見返もしないで問ふ。親仁は背後から答へていつた。

「えゝ、新道が開けました時で、七八年経ちましたやうか。」

「むゝ、そんなものだ、」と技師は一步退つて、仰いで、アーチ形の入口の天窗の上の處を見る。親仁は問寄つて、

「何うさつしやりました。」

技師は疾には應じないで、また後退をしたが、半腹を穿つた隧道の頂をじつと見て、

「此頂上までは、三百二十三尺あるか。」

「ちやうど其位、といふ風説をします、よく御存じだな。はい、と頷いた。

技師は左を瞻、右を瞻で、つかくゝとまた前へ進んだ、穴へは片足をも入れないで頭巾の中からすかして見る。暗闇な洞の中は、耦絲の孔といつても可、大上老君の照魔鏡も此裡をば照し得はしまいと思はるゝが、知識を以て経験を積むだ、此旅客の眼には鼻の眼のやうな小さな向ひの出口まで透して歴然と見えるのであらう。親仁も呆れ顔で立つてもものも言ひかけないで、しばらく控えたから、技師は、默然として深く思ふところあるやうに身動きもしないで居た

が、決然として、振返つて、くるりと隧道に背を向けて、親仁と正面に顔を見合つた時、確として音調で、

「いかん、危険だ、く〜。」

と然ういつた。技師は吐いきをついだが、急いで頭巾を刎ね上げてふつくりと領へ懸ける、雪がばさ／＼と落ちて、外套の其頭巾の萌黄の裏が濡つて、一搖ゆれると右手を懐から出して横ざまに手袋で拂つたが、熱したと見える、清らかな額は汗ばむで、細い、黒い、頭髪が柔かにかゝつて少濡れて居た。

眼の涼しい、色の白い、面長で、そして口の締つた、好箇白面の一少年。年紀は二十二三であらう。但眉宇の間に一種憂鬱の氣の溢れて居る、時々しくない、曇りがちな、孤兒の相がある、そんな顔備。

親仁はつく／＼と顔を見たが、やゝ、まじめになつた、これも穩かでない面色で、
「危険、何が何うしたのでございます。」

うら若い技師はやさしげな、しかし憂はしげな眉を擧めて、

「こりやいかん、親仁、此隧道が出来てから、こゝで幾人人死があつたんだ。」

「えゝ！」といつたが、調子はづれな聲である。

「人が何人死んだ。」

「何が、何處で死んだのでございます。」

「此中で、此隧道が出来てから此中で、」と判然いふ。親仁は小首を傾けながら、

「一人、」

「むゝ、」

「二人、三人、あの時と、それから……」

「怪我は？」

「ちよい／＼ござりましたやうに聞いたでござります。」

技師は其夢を見るやうな眼で、更に四邊を胸した。が靜に頷いて、

「危い、こんな中が通れるものか、歸らう。」

「何、お歸。」

「通れやせん、歸る。」

「何處へ、」

「兎も角、いま休んだ茶屋まで行くんだ。」

七

「其は?!いや、先生、お前様何うなさりました。」

「危いから、」

「何がお危うござりますの。」

「恐しくないか。親仁、」といひかけて技師は落着いたらしく微笑を含んだ。また慌しく衣兜へ手のさきをつっこむで、

「むかし天井から石を落して人を殺したといふ宿屋があつた。此隧道は何うしてそんな易しいものか。天窓へ山を落すんだから、親仁、恐いだらう。」といつてまた莞爾とした。親仁は苦笑して、

「あてこともない、はゝゝゝはゝ、可年を仕つたものをつかえめて、お前様なぶらつしやる、はゝゝはゝ。」

「串戯なもんか、こんな、こんな無責任な、亂暴な隧道があるもんか。煉瓦で埋められるんか易いこつた。山がずんくと下つて来る。足の爪先でも入れやうもんなら、取かへしの着かない横穴だ。私も氣が着いて助かつた。あゝ、親仁、お前も命を拾つたんだ。もう忘れても通つちやあ不可、さあ、行かう。」といひ切ると、其まゝ引返す、親仁は心なしに二足三足後さまに推出されたやうに身を開いたが、何かいはうとする其すきもなかつたので、雪の峠の一條道を、思はず向直つて元來た茶店の方へ、技師のさきに立つて知らず知らず歩行き出した。が、立淀んで、

「それぢや、先生、此隧道はまやかしいものゝ、推つけ仕事があるのでござりますか。」

「仕事、何が仕事なもんか。おツつけ仕事だつていや、兎もかく仕事を知つて居て手を脱くだけけれど、それまでにもしてありません。まるで分らない。大川尻へ鐵の板をあて、一帯もないやうにせき留めて、水が乗越すまでを野原だといつて耕してると同一ものだ。」

「はて、さて、」

「それでも鐵の其板が一尺高ければ、一分時間水の溢れやうが遅い分だ。いままで無事に通つたものがあるとすれば、夫は其一分間の間に通つたんだ。」

「先生、眞實でござりますか。」

技師は言鋭く、

「お前は何だ、この雪道を眼を睡つて通るでないか。そんなことが私に出来るか。」

「はい、いや分つたでござります。なるほど七八年のことはさて置いて、ツイ此秋じや、白鬼女川の鐵橋を川田村から架けやうといつたお役人にこの隧道をまかしましたら、先生のいはつ

しやる、そんな危険なものが出来ましたでござりませよ。から、あんな、もこがあは盲目滅法界、先生が斷つておつしやつて、御供田の方へ架けることにお計らひ下されたればこそ、然もない時には此人方等の家は皆ハヤ鳩とやらの浮巢となつて、雨の降る毎に湖の上を泳いであるくのでござりましたわ。いやまた汝の勝手で川東の十八ヶ村が是非とも川田村の方へといふて、役人と一所に騒ぐのを、お前様が御伎倆で御供田へ架けてくれさつしやつてから、毎年一度あての出水さへ今年は其氣もござりませなんだ。秘すことは知れるとやら、はい、お名前もお國も知りませぬが、誰いふとなくお前様を貴下じや貴下ぢやといふて分りましたから、老人どもは後から拜みますわ。其に違はござりませまい。先生、お前様のおつしやる通りいかにも危険でござりませよ。なれども御存じでもござりませしやうが、これから敦賀へ行かつしやるに、この中を抜かせいでは何處からも通る路がござりませぬ。何分にもこの大雪で、故道はなくなりますなり、中の河内へお廻りでは路の十里餘もござります。こりやまの、茶店までお歸りなされてから、何となさります思召じや。」

黙つて聞いて居た技師はこの言下に答へた。
「三國から船にしよう。」

八

「其船が、さて其船が出来ますやうなら、些少も憂慮はござりませぬが、二三日の此模様では、汽船が出ました處で第一危うはござりませぬかの。」

「何、暴風たつて、あの隧道を歩行くよりはましなんだ。」

「まづ此節では九分九厘まで暴れますが、さうすりや、どちら道危ないのでござります。わざ／＼海の方へお出懸けなさらずに、山をお越になつた方が、いづれお前様の御運なら大丈夫じやろと思ひますがさ。」

「何、船はまだ萬一無事に渡られやうかといふ頼もあるが、あの隧道は見す／＼危険だ、萬に一ツも事なしには通られやしないから、」

「えい、それはさうでもござりませぬやうが、したが先生、また萬に一ツも通られぬといふこともござりますまいに。」

「駄目だ。」と附穂なく技師はいつた。

「こりや先生でもござりませぬ。船も萬一、隧道も萬一、いづれにも萬一なら、」

「何、私は船のことは些少も知らん。火加減も、水加減も艦楫の取りやうも知つちやあ居らん。人まかせに船長を頼むのだから、たとひ大しげに逢はうとも、また何のやうな腕があつて、乗越さないものでもない。だから萬一といふのだけれど、隧道のことは私がよく知つてる。船頭だつてさうだ、止むを得ない場合には萬一を頼んでしげを見込みながら帆も張らうが、誰が穴のあいた船に乗つて出るもんか、穴處でないよ、あの隧道の上に山のあるのは、船に底がないのと同じだ。」

「はい／＼、とはかりで親仁は口をつぐんでいはなくなつた。黙つて、一しきり紛々として身體に重荷の掛るやうな眞白な中を潜つて、再び土間の見える、爐の見える、眞赤な唐がらしの

懸つた、煤けた壁の、店前へ出た。

茶店の趣は一變して、極めて賑しいものとなつて居る。鶏も驚いたらう、入口の土間には一挺駕籠が舐き据えてあつて、駕籠昇が四人土間の片隅に入亂れて、焚火をしながら何か聲高に話し合つて、食事をして居る。別に三人いづれも防寒具に結束した草鞋がけの旅扮装で、件の腰掛に懸て休んで居たが、いま親仁を前にして引返した技師が店前へ立つと、此人數で、前に座つて居心の知れた腰掛を奪はれたのみならず、駕籠の人足やら、旅客やら、いづれも屈究な男が都合七人で、土間一杯になつた上、駕籠で入口を塞いであるので、小さな婆さんなんぞ、誰の袖の下になつてゐるか一寸とは分らない。急變した意外の光景に、入りかけて技師は猶豫つて居る。

これを見て、さきに技師が座つた座に、大の字なりに足を擴げて、火にあたつて居た男が、少し身をすまして、座を譲つて、

「さあ、すつとこれへ、あなた、御遠慮には及びません。」

慙ういつたのは三人の旅客のなかで、一番年を取つて居る。他の二人が引締つた毛布の下は、前垂がけの角帯だけれど、此男ばかりは同一縞毛布を上へかけて、身には洋服を着して居た、天窓はすこ瓦で、色の黒い、眼の細い、丸顔で、あまり品のよろしくない、四十ばかりの男である。

「番頭さん、大良まで何里だね。」と傍に居るのが此折に聞いたので、

「ざつと三里じや。」と答へながら、彼番頭さんの洋服を着たのは、また此方を見て、

「御遠慮には及びませぬ、さあ、まづ、」

技師は無言で立つて居る。

案内者の親仁は振返つて、

「先生、」

「お前、ともかく酒でも飲め、」

と言ひすて、すつと入つた。

九

洋服の番頭はいま隧道から来た技師を見ると、途中で引返したものは思はない。自分達が
行かうとする、敦賀、大良あたりから山越でこゝに着いたものと思つたらしい。

座右に、腰懸の上に置いてある、高帽子と、眼鏡と、手拭とを一掴にして、傍へ取り去つて
技師を請じて、

「何んな様子ですな、路はいかゞなことで。」と先づ聞いた。

技師は唯簡單に、

「危険です。」といつたばかり、顔を背けて、指を折つて、何か算へながら、一向取合ひさうに
もない。

番頭は熱心で、

「へい、何うにかなつてをりますかな。」と腰をねぢつて額をさし寄せたが、技師はもの案じ顔

で冷やかであるので、附穂がないから、其まゝ向ふを見て、鼻を仰向け、あんと口をあいて、
間の離れてる案内の親仁を呼び懸け、やゝ高慢な調子で、

「何うじや、親仁、何んな鹽梅じやな。」

親仁は駕籠舁とさしむかひで、腰をかゞめて、店先へ掛け、向膝を踏みのばして片手を炎に
かざし、少しく反つた形で大きな茶碗を嘗めながら黙つて居る。

番頭は話聲が届かない故で返事をしないのとも思つたか、眉根を皺めて、眼鏡を鼻ツささ
へかせて、額で親仁を見やりながら、

「おい、何うじや、うむ親仁。」

「其處な先生がいはつしやる通りよ。何だ、茶だ、べらぼうづらめ、先生が下された御酒だぞ。」
と駕籠舁へ語を移して斯ういつた。親仁は見向もしないでふつと天井へ呼吸をつく。唇がうる
ほつて、ハヤ酔が出て少し赤ら顔で居る。

徳更に隣人を動かさないで、番頭の威行はれず、何か風向が悪いので、兩人二ツの口へ八文

字に煙管をくわえて、同一の煙草入に左右から互に手を突込み、同時に煙草を捻つて居た。手代風の壯者の一人は、ボンと煙管をはたいて、

「番頭さん、もう出懸けちや何うです。」

「待て。」といつて番頭此度は婆を呼んだ。

「何うじやな、婆さん、些少あ上りの容があつたかな。」

「えい、些少もござりませぬ。」

「何、些少もないか。」

「はい、今しがたの、昨夜内に泊まらしやつた按摩さんが一人發ちましたよ。」

「按摩が、ほ、う、此路にな、いや盲人が道中すりや頼母しい。さしたることもあるまいて、と技師を尻目にかけて手代を見て、

「なあ、多計どん。」

「番頭さん、恐ろしくお弱んなすつた様だね。」

「何弱りやせぬが役目が大事じや。ちよいとでも這つたら御新姐様のお身の上じや、氣を着けねばなりませんわ。おい、若い衆さん、それではそろそろ出懸けるでの、何じや、此さきの隧道は路が一町もあらう、まるで眞暗じやで、また御氣分に障ると悪い。その、用意をした松明をつけてください、景氣よく乗込むじや。」

言下に、駕籠昇は一束にして背負て來た松明を抜いて取つて、手にく焚火の中へ突込むだ。

颯と一陣山風が來て、押伏せたやうになつた炎が發と宙に分れて、三個火が點れたが、あふりをくれて、持直して、

「さあ、よし。」

「お出懸けなさいまし。」

いま一人の若手代は、腰掛から立つて駕籠の前にしやがむで、膝に手をかまへて片手は土につき、

「御新姐様。」

駕籠には、ひっそりとして聲がしない。

一〇

合棒はあとさきになり、息杖を取つてハヤ肩を入れるし、松明はいま一人の手代が一つ取つて前に立つた。あとの二つは手代の人足を捧げて持つて、垂の右左に引添ふた。あはや昇上りやうとする、ト手代は更に頭を下けて、

「御新姐様。」

あどけない、少し口籠つた、優しい聲で駕籠の中から、

「あゝ、多計か。」

「はい、それではお供いたします。」

「待つて下さい、あの多計や。」

「へい、もつとお休み遊ばしますか。」

「何、今何とか言ひましたね。」

「何でございますか。」と手代は憂慮はしけにいつた。

いま既に昇上りやうとした駕籠昇も、これを聞いて別に制せられは爲ないながら、猶豫つて居る。

「あの盲目が何うしました。」

「へい。」とばかりで手代はギツクリ思ひあたつたらしい。振返つて後の洋服の番頭と顔を見合はせたが、雙方目くばせをして何にも言はない。また駕籠の中で、

「善助に然ういつて下さい、私は少し見合はせたいから」と弱々しい音調である。

「番頭さん」といつて手代はまた彼洋服を着たのを見返る。こゝへといふ眼つきをするので、ソツと傍へ行くと。低聲になつて、

「悪いことを聞かせたぜ。なあ、御新姐様に盲人と来た日にや、それ知つての通りの禁物よ。お前は知るまいが、昨夜だつて左様さ。ちやうどお休にならうといふ處へ、お前、旅屋のこつ

たからお療治はといつて盲目が來たらう。何もあの、御新姐様に執心をかけて取著きさうな、ソレ新町の盲目のあれとは似もつかない、たゞの旅屋を稼ぐ按摩だつたのに、一眼御覽なさると眞蒼よ。今朝も其響で御氣分が悪いのだ。飛んだことを聞かしたものだ、私等大の男が何人附添つてゝも、いま此さきへ盲人がたつたといつちや到底急におたちにはなるまいて、こりやお見合はせじやの。何てつたつてお聞入になるものじやあない。お心の休まるまでな、ともかくお待たせ申すとしやう。嫌な蝶々に取着かれて、死んだ人さへあるといふから、御新姐様の盲人ざらひは、こりや私等には度合の分らない位なものだぜ。」

手代は頻に頷いて、

「眞實でさ、ぢや然うしやう。」

立直つて、

「御新姐様。」

「可いかい。」

「へい、お見合はせが宜しからうと、へい、番頭さんも然う申します。」

「あ、面倒だつたね。」

駕籠の中は静になつた、松明を持つた三人は其意を了して一齊にふるつて消した。土間へ叩きつけると火花が散つて、ばつと雪の中へ交つて消えると、鼠色の雪空がかぶつて茶店がまた薄暗くなる。爐の煙は白くなつてむく／＼といぶつて居る。駕籠昇はついたものが離れたやうに先後に分れて片隅へ寄つた。

「御新姐様、しばらくお見合はせになりますなら、まあ、ともかく些と外へお出ましになつておあたりなさいませんか、冷えますとまたお胸が痛みまじやう。山家でございます、むさくるしうございますが、一向お心置きはございませんで、へい。」

しばらくして、

「ぢや、些とお邪魔になりましたやう。」

の端が土間にこぼれて、袴の厚い襲着の裾がしつとりと爪先に乗ると半身が顯はれる。

一一

藤色縮緬の頭巾を被つた、高帽の形の可、黒眼勝の眼の涼い、丈は高い方のすらつとした、見るから美しい、氛高い、人品なのが、サラ／＼といふ衣ずれの音で立ち露はれると、少しうつむいて願で掻合はせた肩掛の襟をおさへながら靜かに二三歩、歩を運んだ。

手代は件の三角形に並ばつた腰掛をはづして、急いで一方の口をあけて、

「何うぞこれへ、何うぞ。」といつて中腰になる、無言でそろ／＼と來てなかへ入ると、またびつたりと腰懸を寄せた。端の方へ歩み寄つて、と見ると向の腰掛には技師がさつきから手帳のやうなものを繰廣げて、もつむいて見て居たので、

「御免遊ばしませ。」と慇懃に會釈をして腰をかける。同時に善助は高帽子と其手拭を引摺つて座を立つた。手代も傍へ退かうとする。

「可よ、構ひませんから、其處に。」

「いゝえ、何ういたしまして。」

對座は恐れありといふ狀で、慌しく席を駕籠昇の方の焚火へ移す。三角形の腰懸には唯むかひあつて二人となつた。技師はつく／＼と見て居た手帳をばつたり疊んで、下に置いて、少し胸を張つて身體をのびたが、また前へ屈むで手を其額に加えた。

「先生、先生様。」と案内者の親仁は遙かに手をついて乗出して呼び懸けた。が、技師は黙つて居た。

「もし、先生、えゝ、それでは何うなさります、何うしてもあの隧道を通らつしやりませぬと極りましたかの。」

技師は沈黙して居る。

「先生、先生。」とまた呼ぶだ。

「む、待て。」といつた技師は手帳を取つて、ぐつと衣兜へ突込むと膝に手を置いた。

「少々御免なさいませよ。」と藤色の頭巾は優しく然ういつて、櫓に両手をさしのべるトタンに肩を這つて肩掛がさらりと落ちて腰掛の上へ疊まる。

「さあ、」とばかり、はづしてある手袋を取つて片手に攔む、無頓着な技師の顔を、頭巾のなかより御新姐はちつと見る。

技師はまたうつむいた。

「先生。」

聞きつけない。

「先生。」といつて親仁は一膝摺り出したが、何とも言はないから、また引込むで、今度は外の方を見て空模様を伺つて居る。

技師は其まゝうつむいて居た。藤色の頭巾は襲着の羽織姿で、すつと立つて、腰掛の一方から出やうとする。

手代は見ると心着けて、

「お手水ですか。」

黙つて、頭を振りながら、まはつて、技師の背後へ行つて、氣の着かないのを傾き見ながら、ちつともためらはないで、手を其うなじへソツと懸けて、含んだこゑで、

「何うしたの？」

技師は驚いて顔をあげた。

「三さん。」

屹と眼を見合つた。

「三さん。」

技師は色をかへた。

「分りませんか。」

「……………」

「私。」

「信乃ですわ。」と云つた時、頭巾を取つて、氣高い顔で微笑んで、
「ね。」

一一

技師は顔を背けてしまつた。

「よそくしい、何でございます。」と投げるやうにいひすて、信乃といつたのは、つかくと元の座に復つて、うしろへ手を廻して肩掛を揺り上げながら、チヨイと肩を縮めて、
「寒いこと。」

四邊を胸はして、はつとしたやうす。駕籠昇が四人、案内者と婆さんと、殊に供の番頭手代が皆これを見て居たのである。技師は何とも云はないで、爐に燃料を添へて、鐵火箸をぐつと入れて灰をすかすと、白い煙が續けさまに二ツ三ツちぎれたやうに飛んで、炎がばつとあがつて、

皂莢茨の燃え込むのが、はぢいて、はぢはぢはちと鳴つた。灰はたつて、降りかゝつたが、信乃は燃え立つた炎先に翳してた手を引込まして、肩掛にかくして肩をしめて、脇の處で胸を抱いた、願が襟に埋んで居る。

技師は肩を擧めながら、手拭を掴み出して、何うしたのか知ら、仰いで額の汗を拭つた。
善助は來り小腰を屈め、

「御新姐様何うなさいますな。」

其まゝ、願を襟に埋めたまゝ、見向もしないで、

「待たうよ。」

「何時までお待ちなさいますな。」

「盲人はお前、足が遅からうね。」

「へい、路で追着かないやうに隔りますまで待ちましては、かやうな日脚でございますなり、暗くなりましやうも知れません。」

「仕方がないから、さうしたら此處で泊りましよう。貴下、」といつて技師を見る、技師は顔を返してちつと面を見合ひ、

「貴下は何方へ行らつしやいます。」

「敦賀に越すんですが、此さきの隧道が通れません。武生へ歸らうと思つてますが、もう草臥れつちまひました。」

「通られません。え、隧道が何うかなりましたかな。」と番頭は奪つて聞く。

「何うにもなつちやあ居ないですが、何うにかなるだらうと仰しやるんで、」と親仁は引取つて口を挟む。

善助は振返つて、

「何うかなる、そりや何うしたことだな。」

「先生はお前様、あの隧道の人相を覽さつしやつたんで、いまにも壊れさうだで、危いとおつしやるんですがす。」

「何じや、隧道の人相じや。」

「人相じやないがの、何でも、はい、私等が此山道のことを心得て、眼を瞑つてなり、てくてくと歩行くでがす。其とおんなじにあの先生は隧道のことを心得て入らつしやるで、危い、こんな處が通られるか。技師じや、鐵道の役人じや。其道のものがあの隧道を通るのは、船頭がいけを見かけて、底のない乗に乗つての、佐渡が島へ渡るのと違はんと慥うおつしやるので、番頭はひよんな顔で、

「や、大したことになつて來たなあ。」

「私はハイさほどにもあるまいと思ふでがす。けれどもまた、」

「いや、此方はそんなことは何でもないが、盲人が大難じやとおつしやるわい。ま、ま、何しろお心の安まるまで、日が暮れたら泊るとして落着いて居るが可からう、なあ、多計どん、千どん。」

「談の材料でさ。」

「何も可うございませう。」と手代二人は然う云つた。
 緘黙してさしむかひ、身動もしないで居る二人が中にはまた炎が消えて、皂莢茨の蔓の燃えたのが、一條真赤になつて居たが、ほろ／＼と細く折れた。其時山が鳴つて、雪が斜に降つて来た。

一三

「それでは先生、お前様もこゝで泊るとさつしやりまし。こゝがものゝ峠でがす。また何として隧道を見直さしやつて、お考が違ふてから、通る氣にならつしやるまいものでもないが、あとへ戻らつしやつては、又のほりでござりますで、ゆつくりお考えなされましたが可うござりませう、」

技師は頷いた。

「御新姐様、あなたもまあゆつくりお休み遊ばしたが可うございます。何の道半日か一晚のこ

とでございませう、」

番頭の言に信乃は固より異議はない。駕籠昇も尻を据ゑる。皆が呼吸をついてゆつくりする。案内の親仁は立懸つて、

「ぢやあの、婆さん、何の道不自由な御承知じやで、氣まゝに泊めてあけさつせえ。」

多人数の旅客に爐縁を占められて、腰掛にも柵にも居たゝまらず、しかし珍らしい、きれいな女客と、うつくしい、うらわかい技師とに見惚れたので、納戸にも引込まず、店口に蹲んであの緋緘の鎧をかけた、煤けた柱によつかゝつてつくねんと、前刻から、あちこちのいひ分を聞いて黙つて居た婆さんは、いま親仁が言を聞くと、居直つて前へ出た。からびた聲で、

「まあ、お前様方は何をいはつしやる。此處さ、お前方何處だと思つてござらつしやる。かすがの、峠でござらあ。冬空に此處へござつて草臥れたの、ゆつくりじやの、泊らうのと、まあ、何たるこつたの。其上に見さつしやい、此雪じや、休まうの、泊らうかといふ段かいの、こゝあてともないことを。このまた親仁どのが氣樂でござらあ。」

内の納戸を行つたり、來たりするやうに、通馴れて居る山稼の男でさいが、一足づゝ氣をつけて、澁ッ面しぶつめんで空を見て歩きまするわ。一時おくれると路が埋もれてしまひますが、こゝで降籠められたら雪籠にあひますで、これが武生に居りや、福井へ歸ることが出來ますなり、さきの大良まで行つてござれば、後は海邊じやで吹雪ふぶきいてから敦賀へ何うなりとして參られまする。此の峠たうげで閉ぢられては、さきは十二社まで二里半の山中なり、あとは武生まで三里十町の坂道なり、あとへもさきへも行かれませぬで、來年の三月彼岸前びなんまへにならひでは、私わしがこの小屋から里へ生れて出ることがなりませぬぞ。一昨日きのうから今朝まで二晩、昨日來さつしやつたなら半日はんじちと一晚、昨夜着かつしやつたら今朝までよ、それだけなら泊めましたのでござるけれど、見さつしやれ、この降じや。これでは半日も覺束おぼつかない。さきほどからお前様がた、平氣へいきで茶を參つたり、煙草たばこを吹かしたりしてござらつしやる。やれもく心ない人達じや、此年このとしまで生きてゝさへ覺えて三度目の大雪おほゆきに、何としたものであらうと、私は氣が氣じやござりませなんだが、お懐なつかしい、また多日人様たじちひとさまにお目にかゝられまい、雁かりを抱いだいて寢ることか、しばらくでも慫かう

やつて賑やかにして居りたさに、つひ申さずまをにをりましたが、お泊りなどゝは思おもひも寄よりませぬ。一時ひとときもはやく立たつしやれ。駕籠かごの衆しゆうも素人しらうとじやの、第一だいいち親仁おやぢどのが何うしたものでじや。と、すつきりと云はれて、口籠くちごもつた親仁おやぢは慚悔ざんかいの體で、

「いや。」

「いやじやござりませぬ。さ、ちやつと、何方どこへなり早くたゞつしやりまし。あれ／＼日中ひなかに鶏にせりが鳴なきまする、お名残なごり惜をしい、なんまみだ／＼。」と口中こうちゆうに誦じゆして、婆はは愁然しゆうぜんと眼めを眠ねむつて、黙々もくもくとして冷灰れいぐわいのやうになつた。

「親仁、」と駕籠かご昇かきどもは一齊せいにいつて、きづかはしけに親仁おやぢを見た。親仁おやぢは穩おだやかならぬ顔色がんとしよくで、

「違ちがえねえ、まつたくだ。」

「さあ、來た、はじまつた／＼。」と手代てだいは忙いそがしさに身みを起おこす。善助ぜんすけは慌おぼてた狀さまで、つか／＼と寄よつた。

「御新ごしん姐あや様さま、親御おやぢが御大病ごたびやうでおいで遊あそばす、もとへお引返ひつかへしなさりますわけにはまゐりますま

いが。」

「あゝ、」

「それだと早くたちませんでは。」

信乃は得堪へない色で深く頭を垂れた。技師は仰いで胸中の苦を忍んで居る。皆黙つた。

信乃は顔をあけて覗くやうに技師を瞻つて、

「あなたはお急ぎではないの。」

「私も急なんです。」

「それでは参りませう。」と信乃は意を決したやうである。

信乃の前刻の様子といふものが、たゞ盲人がさきへ通つたといふから、いやなもの道で一所にはなりたくない、とばかり好嫌をする、單にわがまゝでいつたやうな、さやうな軽々しいのではなかつた。

更に技師が隧道を危ぶんだのは、其安否を疑ふといふやうなことではない。一步でも踏込めば自分の生命を奪はれるのが何かの因縁にでもなつて居るかのやうに、それほどまでに其危険を信じて居るので、いまこれを諾するとすれば、死を決するのである。否、たゞ死を決するといふ容易いのでない。決心は最後の策で、何等か萬一といふはかないながらも望はあるが、底の無い船であらしの中を佐渡ヶ島へこぎ出すのだといつた隧道を通るのは、何の事はなく死に赴くといふものである。

それほど大事なことなのに、唯一言さそはれたために、忽ち其色の動いたのは蓋し怪しむべきことではないのか。技師は顔の色をかへながら、呼吸ぐるしい、おもしろい調子で、
「参りませう。」といつて眞蒼になつた。

一四

「番頭さん、何うしたんです、番頭さん。」

真先に立つた番頭は足をすくめた。多計、千、其背後に續いて、空駕籠はあとから来る。番頭は前途をすかしながら、退さつて隧道の口にためらひ、

「待て、心持が何か變たわえ。多計どむ、まあ、急くな。茶店を出る時はたゞあわたましいので、何の氣もつかなんだが、此眞暗な薄ら寒い穴へ面と向つたら些と怪しくなつたて。何じやろとをかしいぜ。考えて見ると、一番さき盲人でけちがついたわ、御新姐様がちぶくり出したわ。其上にあの技師とやらが一度こゝへ來てまたあつちへ引返したのじや。可いか。まづそれこの處が危いとして見るか、此方はあのまゝで休んで居りや何事もなしぢや、また技師もよ、一度引返したものを其まゝにして置けば、別條はなしで、まづそれまではものゝ知らせで天道様のお助けといふものじやて。其處で、さきも此方も見合はせることに極つたわ。そこへあの婆さんが故障をいひ出して、それで到頭また出かけることになつたは可が、けたいが悪いな。御新姐様も、技師も何か知ら考えて見るとすべて影法師が薄かつた。あなたが行けば私も參ります、あなたが行くなら御一所に參ります、と何かいやなことを知つても居ながら、覺悟を

していつたやうな口ぶりぢやての、第一鶏の聲も變なり、婆のお名残惜いがいやなり、あのまのお念佛も氣にくはぬ。して見るとあの二人は何かそれこの一ツ穴で因縁事とでもいふやうなことではあるまいかさ。無からうゝそんなことがあつてはならず、またありもしまいが、こりや些同時に同一穴中は恐ろしい。なそれ、此方へ來てから氣のついたといふも、また定まつた天命じやあるまいか、多計どん、まあ、ともかくもこゝで立窘とやれ、何うじやい。」

「えゝゝいやなことをいはあ、番頭さん、ぞくゝするぜ、こいつあ、一足もあるけやしない。」「待てゝ、幸ひ松明を持つてさきへ入つてるから、幽に行前が見えるわ。すつとあの二人が通すぎて、むかふへ抜けるまで、こりや何がなしに見合はせることにしやう。」

と異様な顔色で震へる足を踏固めて動かないから、一筋道なり、一列七人、づらりと黒い形で、雪のふりしきるなかに立停る。

真先の番頭は、かゞんで隧道の中をうかゞつて見る。眞暗の穴の中三十五間の半ばあたりでもあらう。

茶色の肩掛の後姿が、いま一團のあかりの中へほんやり見えた。人形だけの大きさで頭上、左右の崖は水氣を含んで黒いのにあかりがきして、キラ／＼と光る。足許には此雪にも岩の點滴が落たまつて蒼くなつて颯と走つて居る。藤色の頭巾の色のやゝ黒ずんだのがひつたり胸にくつついて細い手で其肩を抱いた。技師は松明を一ゆり揺つて頭高く、ツとさしがざした。其火の岩にうつる中に、眞黒な外套ですくつと立つたのが、いま松明をあけると穴の西の入口を見返つた。茶色の肩掛、藤色の頭巾と黒の外套と一つになつた姿があり／＼と見えて、松明をあけて振返つた技師の顔色は土氣色である。と見る時、わつといつた一列七人の男は、眞白な雪の上へ巨砲の口から射出されたものゝやうに哄と投出されて算を亂した。

山が暗くなつて、けたゝましい鶏の聲。

祇園物語

はしがき

御存じの彌次郎兵衛、神風の伊勢に詣で、古市の妓楼千束屋に、上方の檀那と洒落れ、座着の猪口の遣取りには、器用な京談を遣ひしが、中立賣千本通り酒も楷子でヒヨイと上る邊栗屋の與太九郎と、一座のおやまの買論するや、忽ち管を卷舌にて、おへんが變じて遣えねえの真中のおぢいと成る。此の篇の京言葉、覺束なくも路一條は辿ると雖も、綾が八衢に及ぶ時は、四條小橋でトボンとして、祇園は何處だと云ふやうな、おのほり式が澤山あり。これしかしながらお辨女郎のためにはあらず、なかなか酒に酔へるにあらず、作者まことに眞面目にこそ。

それ如月の夕越なれば、花輪櫻も雲に墨繪、まだ紅梅の苔も黠れず。茶店の床几の緋の毛氈に、瀬戸もの火鉢が寂しく、ほつ／＼焼穴が可哀に目に着く。

京の名所の寺々の鐘の、どれも響かぬ、フトした静止間で、ひつそり往來の途絶えた時、東大谷の松林を、山門に向つて——綺麗に掃濟めた埃の無いのが、むざとは人の通はぬ、奥山家の一筋道で、計知られぬ何かの境へ導き入るゝかと、もの懐かしく、心細く且つ陰氣に見えて、無明の橋の思がする——敷石の上を、唯一人、うしろ向きに行く法師があつた。

旅僧であらう……線香の煙が、ソヨとの風もないために、ひたと袖袂の、髪積に絡まつたやうな鼠の法衣に、袈裟は懸けず、長途の旅を思はする、露に塵に、朽葉色にも成んぬ、脚絆、

甲掛。

素足に草鞋で、棺笠を、被らず片手に提げた。頭巾もなく、月も射さば痛からう、ゴソと二分ばかりの、髪のはきは向少い。白木綿の風呂敷包み、真中を紺の紐で結えたのを左手にした。……其の笠も、西行香負も、墓所に向ふ謹みに、早や解き脱したものらしい。

途中の塵埃も拂つたか、旅の法衣に砂も留めず、すきくと清けにも見ゆるのが、露にしつとりと濡れたか、と殊勝にもあはれである。

茶店の端に婆も居らず、遠近に豆腐屋の聲も無い。

花輪櫻が唯一樹、今其處を通り過ぎた旅僧の袖を、衝と及腰に引留むるが如く枝垂れて居た。渠の姿は少しづつ、町より、家より、四條より、此の圓山の一處より、其より、獨り一本の櫻の枝に遠ざかる。

後に霞なく、前に霧なく、真中に靄もなく、透通つたやうな其の松林の敷石を渡るのが、臍に成るより一層幽に、浮世に離れた趣である。

茶店の前の人なき處へ、ばらばらと、花籠を開いたやうな、金銀の簪、錦の帯、八尺扱帯、一分の珠玉、振袖、蹴出し、襦はづれ、友染、鹿の子、緋縮緬、菖蒲、紫、紅、白粉。紋の廻りも離然と軽く、歩行く姿は舞の振で、扇を重ねた六七枚、祇園の舞妓、藝妓ども。

御守殿の手兒舞ふるやう、極彩色にぞめて練來る。

真中に、煤拂の武者の如く、外套の袖を擴けて、頭輝くハイカラの御大將。四人連れた舞妓の一人に、酔つた額の鬱陶しさ、黒の中山高を脱いで持たせ、一人に銀飾りの杖を、お太刀の如く極めさせて、くなくとなり、ふらくししながら。

「狸々！狸々！」

と大な聲して、

「足許はふらくくと、入江に枯立つ……足許はふらくくと、入江に枯立つ……猿澤の池に流灌頂は何うやい、あはゝゝ。」

と笑ふが、笑ふのが睨む如く、下唇がべろりと突出て、見据ゑる眼が眠むつて細い、が、

京の人には珍らしく、臍がぐいと釣れた男。

頬骨の角張つた、額の広い、髪黒い、唇赤い、鼻は餘り隆くないが、眉の濃い、……脊は小造りだけれども、肩幅の広い、小肥りに肥つた、三十ばかりの立派な野蕩。

酔つた唇の色の濃いだけ、頬骨から小鼻へ掛けて、薄りと蒼味を帯びて血走つたやうに臉が颯と、額を仰向けに吐く呼吸が迫つて、ものを云ふ、眉の、じりりと顰むで暗いのは、酒亂と見えた。

二

其の蒼白い顔に、火のやうな熱い笑を顯はして、

「これ、何うぢやい、猿澤の池の流れ灌頂は？」

「可厭らし」と、附着いて居た藝妓が一寸退る。

「何ぢや、野晒しの癖にして、可厭らしもないもんや、肩貸せ、これ、退くないやい。」

と、ぶん廻しの様に威勢よく、霜降めりやすの襦衣を長く、腕を高く揮廻す、と間近に居た可愛い舞妓が、兩方の髪をはつと壓へて横を向く。簪のピラ〜が夕風にびらりと輝く。

「わは〜は。」

と笑つて、苦い顔して、唇を噛みながら、

「……足許はよろ〜と、入江に枯立つ、足許はよろ〜と……」

「分つとる……」

「よろ〜とばかり言はずと、何ぞ違つたのンお唄ひやすな。」と、中でも年紀上ちしいのが振り向いて聲を懸けた。

「ふん〜、何やかて謔ふて聞かせる。……な、シテと小がきにある奴や。可えか……これは洛中一杯に幅をいたす、六條の縮緬問屋、大竹和八とは我が事なり。今日は志す事も何もなく清水に詣で、高臺寺に遊び候。之より祇園に立歸らうづる處にて候。」

「そないな事、分つとる、可いやないか。」

「見とうもない、大なる聲おしなすな。」

「地聲やが、大なる聲は。……京ではこれ、御慮外ながら釣鐘と云ふ男や。——可か、戀も無情も、私に撞木の當りやう一ツやて！ゴーン、ウ、ウ、ン、モンくくく、ワン、グワンぐぐぐ。」

「お。」

と云つて、三人ばかり一齊に耳を壓へた。

「何ないしやはる。」

「助からんえ。」

「死にさらせ。」

と怒鳴つて、又目を眠つて物と呼吸。

「序に十八番の長唄や……旅の衣はすどかけの、旅の法衣はすどかけの、露けき袖や絞るらん。」

これは、一緒に唄へ、え、口三味線やらんかい。」

唄は違つても足許は如件、よろくで、圓山の同一所を、四邊八面にひよろついたが、フ

ト思出した様に、どたくと駈出して、すらりと優しい影のやうに立つた、花輪櫻の根に近く、
大手を一つ、ぬツと開いた。

腰が、据らず、のめつて俯伏に皮らうとする。

「危いえ。」

「わやゝな。」

で、はらくと寄つて藝妓、舞妓は、背後から取巻いた。……中には美しい眉を擧めたものもある。

ぐんなり脊を揺り、反つて覗め、

「これに別嬪の候。櫻、これ、私が方へ靡けやい。背きさらさぬと、汝」

と目を据る、唐突に對手も構はず、……

「あれ。」

と言ふ、藝妓の腕をぐい、と取る、と身を揉む姿の膝もわななく、挫折るやうに引張りつゝ、

「な、言ふ事を肯きさらさぬと、薪にして大文字の下積ぢや。寺の門から墓所抜けに打上げらんや、どないする。」

と切なさうに苦笑ひをしながら、枝ぶりを睨廻はした目が、暮れかゝる東山の墨染を衝と仰ぐと、遠い國を、海を隔て、望むが如く、敷石の白濱や、漣の松の蔭。靜かに水脚を引いて行く、流木のやうな、旅僧の、寂しい後姿を認めたのである。

熟と視て、大な口をゆがめたが、嘲つてニヤリとした。

「年寄ではないやろ、あの、坊主の背後つき何うや？見て見い。」

と酒の香を横顔に吐懸けたが、忘れたやうに手を放す。

今引抱かれた、其の若いのが、腹を立つた様子もなかつた。京の女は聲も優しい。

「あ、ほんに、少うおすなあ。」

三

和八は目を据ゑて、頷いて、

「年紀の少いに阿呆な奴や。坊主に成つて、後生願うて、地獄の門へ去にさらす……何うや、祇園町でもすぐり抜いた天人に取巻かれて、凡夫が爰に、可い機嫌でましますぢや。」

しよほくと草鞋穿きで行くあの状見い。しゆみさが堪らんわい。……何も功德ぢや、餓鬼に酒一ツ振舞ふて、綺麗な佛拜まさう。一番、白粉まぶしの紅でうで、鮫の揚物と仕る。わは、面白い。」

又唇を噛んで、

「舞妓、これ、ちやつと行て、何なと云うて、あの坊主、速て來い。」

「あた怪體な、およしやすえ。」と銀杏返の年上ながの、舞妓に目配せして言つた。

「私、可厭や。」

と其の舞妓が云ふ。

「吐かすなく、行けい云ふたら行かぬかい。時が來れば釣鐘が鳴りますわ。はて、朝の別が

つらい云ふて、鐘撞かせずには濟まんやないか。和八が御意は、我手で撞木を當てる奴ぢや。鳴出いたら聞かさにや置かぬが。

「さあ、行かぬかい。行かすば大將御出馬ぢや。」

「待ちいな、貴郎が行かはつたら喧嘩やがな。……どないしまほ……まあ、千鳥はん、汀はん、あない言やはる、あんた二人で行て見なはれ。」

と氣の無さうに、銀杏返が指揮をする。

「あい。あい。」

からころ木履のじやれた音。網を切つて車を推した、花籠二ツ、くるくるとめぐる風情に、揃つて敷石を駈出した。

彼方でひらりと法衣の袖に、二人の姿の纏れたは、おはぐる蜻蛉に衝と投げかけた、かどりの兩端の紅の珠かと思ゆる。

「何うや、坊主は来るやろな。」

「來やはりはしまへんえ。」

「なあ。」

と見交はし、言交はす。

「馬鹿吐かせ、極樂の接待や。京の藝妓拜まいて、酒振舞うと云ふ菩薩に、搔躰はぬ奴があるか。」

「あれ、見なはれ、汀はんが坊はんの袖につかまりやしたえ。」

「あの妓が行たで、連れまして來やはるか分らん。何云うたかて、誰も叶はん妓やはけな。」

「面白い、坊主が一つくりと廻つた。はあ、鮎壺の浮いた處や、汀に千鳥も見えて候。」

ぐたりと成つて、身體を振つたが、瞳を返して、向ふの角の茶店を見た。

が、切なさうに眉根を皺めて、

「え、お岸、何しとる。此處へ來い。それ、今坊主を呼んで來るんや。貴公、大好物なもんやろが。」

と、何故か、唇を曲けつゝ呼んだ。

其處に、漆のやうな房りした黒髪を、引結めの櫛巻、黄楊の櫛にわがね餘つて、はらりとす
る。襟脚の白い、耳元の清らかな、瓜核顔の、鼻筋のすつと通つた、一かは目瞼は寂しいが、
黒目勝のぼつちりと、水晶に露の滴る、うるみのある、品の可い、優しいのが、美しい眉を展
いて、やゝ其の顔を仰向けに、撫肩の細りした、片手、なよ／＼と疲れた状に下へ支いた、白
魚の指の映る、毛氈の色が榮えて、ちらりと篝の燃立つばかり。

質素な服装が水際立つ。……羽織は着ないで、紺地へ茶と藍と、忘れたやうに紅の交つた亂
立のお召縮緬。黄金はなしに、錦と見ゆる、印度更紗の帯を、少し胸前を下けて、衣紋は寛い
が、胸の薄い、お太鼓のばちん留、淺黄の麻の子の脊負上げの結んだ端、媚かしいは其
ばかりで、下着の色も見えないまで、襦を深く、床几に淺く、すらりと靡いて腰を掛けた。
年紀は丁ど……、一ツ内外。

四

端近に休らう、敷居を隔て、角の其の茶店の軒下に、でこでこと丸鬚に結つた横肥りのし
たのが、仰々しくも黒縹子の丸帯、襦袢が水紅色と云ふ難のある他、申分の無い、誂へたやう
な乳母どのが、取つて二ツぐらゐ、人形かと思ふ、色の白い、いたいけな嬰兒を胸はだけに大
事と抱いて、密と差出す。

莞爾々々とする其の嬰兒に、……片手で銀紙の風車を見せて、風が無いから、其の打仰いだ
細面に、片笑鬚を見せながら、見得もなく、フツ／＼、と口元も紅梅の薫を吹いて、くる／＼
と廻はして見せ、餘念もなげに恍惚した、藪たけた婦がある。

之は今しがた一行が、さんざめいて来て、どや／＼と櫻の許へ崩掛つた頃、後れて、乳母を
お先立に、後に添つて、フト紅染めた蔓の細路を辿る體に、寂くすつきりと美しく、此の圓山
の片足へ、山の方から辿つて出たが、連には構はず、心易けに、あり合せた其の床几に掛けた。

渠は祇園の名妓である。

お岸、と其の名を呼ばつた、和八が號する釣鐘も、後朝ほどには身に泌みぬか、聞きつた様子もなく、澄まして風車を吹きながら、……擱まうと出す嬰兒の手から、じらすやうに、一寸引く。

「私にかい。」

彼方では旅僧。汀と千鳥を左右、草鞋に不意に漣が来てかゝつたやうに、俯向いて右瞻左瞻。

「馳走をして遣る、一緒に来いと……あゝ、向ふに見える、あの黒い外套を着て、毛皮の襟巻をした御仁が。飛だ串戯を、

と事もなげに笑み、

「失禮をする。急ぎます。」

「嘘やおへん、なあ、汀はん。」

「一遍歸つておくれやす、お迎ひに来たのどすはけ、どないなとして。」

汀の方が大人びて、友染の腰を屈める。小兒ながら其の慇懃さに、と、出家もつい會釋を返して、

「いや、串戯でなくば、よくお禮を云ふて下さい。御志有難う存じますが、最うやがてこれ。」

と向直つて山門の暗さを仰ぎ、

「日も暮れます。些と當山に知己のものがあつて訪ねます。夜分に成りますと、不都合と存じます、直ぐに参りたい、失禮をする。お思召は受納いたしました……分つたかな。……厚くお禮を申す。」

と言棄てると、檜笠と風呂敷包を、其の両手に、法衣の袖を颯と拂つた。

「御坊はん。」

汀がさそくに、追従つて袖を控へ、

「御先祖の日やよつて、回向して欲しと云ふてどすえ。……と眞顔で云ふ。

旅僧は莞爾とした。

「お、恰憐な嬢だ。」と思はず其の頭を撫でさうにしたが、簪に心着いて、笠の紐を捌いて引いて、

「御覽の通り袴は被ても、まだ一向な青道心。出来るのは、鬘伽を汲んだり、墓の掃除をするばかり。お念佛の節もよく心得ません。御先祖代々の御回向は、なまかな出家より、貴方が御自分になさる方が、却つて御追福に成ります、と然う申して下さい。よい嬢だな。さあ、お放し！」

「千鳥はん、つかまへや……放すとならんえ。」

「直接に言うておくれやす、私たちが吐られるはけな。」

と千鳥も振下つて、ぐい、と縫る。

「一寸行くには仔細ないが、大分酔つて居らるゝ様子、で、斷るに煩しい。」と言ひながら、何と思つたか、風呂敷包を腕まくり、ぐい、と、手繰つて、檜笠を前下りに二人を見ながら、引締つた口元で丁と結ぶ。之が支度で、来るよ、と思つて、ほゝ、と笑つた、舞妓二人は驚きの

聲。

あゝ何處かで啼く、……ホー法華經。宗旨違ひの大谷へ、翠の霞がほんのり渡る。

五

わざ／＼然うして、笠を着たのは、實は、手を明けるためであつた。

白の手甲掛けた左右で、突然、兩方の袖に掴まつた二人の舞妓の腮の下を、くす／＼と遣つて、櫛つて、

「こちよ／＼、と口で囁す、……と汀も千鳥も、きやつと言つて、一審み。だらり結びの赤地の錦も、京鬘も、友染の振袖も、五色の糸で花輪を重ねた手鞠を繰つたやうに成る。

ト櫛り留めて、旅僧は身を開いた。

が、其のまゝに縫れ合つて、恰も魅せられたものゝ如く、傳へ聞く法師が算術で呪はれた小女房のやうに、絶え入るばかり、身悶えして笑留まず、敷石の上にひつたり固る。

振返つて呵々と笑つた。旅僧は脊伸をした。が、後をも見ないで、山門へづかく行く。駒下駄の音が沈んで、小刻みに、すら／＼と舞妓どもの傍を衝と通つて、
「一寸……」と云つて、背後から優しい聲を、凜と呼掛けたのはお岸である。
「一寸……待つておくれやす、御坊はん。」と、走り寄つは呼吸つかひで、おくれ毛がはらく戦ぐ。空惚けて、

「はあ、私の事か。」

「貴下はん。」

「私に、何か？」

「お願ひがあるのんえ。」

「而して誰方で？」

「私な……」

と薄い松葉色の、絹の襟巻を解いて取つて、

「祇園町の、岸といふ藝妓です。」と衝と弱腰を軽く、二枚襲の裳で受けて、膝をすらりと敷石に姿を細く、撫肩の手を支いた。頸の雪の下透く紅梅。脇明けちらめく紅が、敷石の表に映つて、山門へ續いた花の下道、此の黄昏も臙に媚めく。

出家も聊か驚いた顔をした。

「舞妓はんが来て緋らはつても、お越し下はりまへんよつて、私に行て、連れまうて来い云うてな、お客はんが言やります。

今、貴方はんの右りの袖つかまへて居やはつた嬢な、汀はん言ふて、大抵の事は、あの嬢が出やはつたら出来るのえ。……其でもあかんよつて、他の人たちは、叶はん言うて、誰も使によう来んのどす。

明かな！祇園町に、あの御出家一人、連れて來得えるものないか。岸、行て来い、……と無理言やはる。

口惜いやないか、私が行て來る、言うて、うけ合ふてお迎ひに來たのどす。

貴下はん、御迷惑なやろけれど、私な、後生やよつて一遍戻つて、遊んで行ておくれやす。……何の、私が導びいて去ぬのやおへん。貴下はんがな、助ける思ふて、……彼方へと連れ戻つておくれやす。嘘やおへん、肯いておくれんのやつたら、髪切つてな、尼に成るよつて、お弟子にしておくれやすや。」と静かにしめやかに言ふのであつた。が、意氣達は尋常ならず、繊弱い肩に呼吸が響く。

檜笠をかなぐり脱いで、ト取直すと、跪いだお岸の膝を掬ふが如く、裏を翻して一揮して、
「之は過分な。先づ、お手をお上げ下さい、お膝を。」と言ふ。

「然したら、肯いておくれやすか。」

「さあ？」

「然やなかつたら、私、此處の土に成るのどす。」

「いや、直ぐにお供をします。」

「真個にかえ、御坊はん。」

「さて慥う成ると、如何にも恩に被せがましく、勿體振つたが、お恥かしい。」
舞妓二人がはら／＼と寄つた。

汀が小癩に、莞爾々々して、

「御坊はん、こちよ／＼／＼。」

「はて、と片手に額を撫で、法衣の袖を合はせたのである。

六

「やあ、御坊、こりや、お出で。」

和八が筒拔けな大きな聲。

一人の藝妓が氣の毒さうに、

「吃驚するが、何や、貴下。」

「豫て地聲や、と斷つたるが、喧しい。」と反對に叱りつけて、

「御坊、はじめて逢ひますわ。」

「はい、お初に。……と腰も口も軽い挨拶。旅僧は何も逆らはぬ氣で居るらしい。」

「ですが、御坊、のいた中ぢやござへんぜ、手前は太竹和八と言ひます、町中の釣鐘でんす。」

「結構でございます。」

「まだ何も寄進に附かうとは言はんでな、結構は早過ぎますわ。」

「はい。」

其の柔順さに、張合抜けして、ゲツ、と一ツ噓を遣つた。

「いや、口ほどには毒の無い男でんす。は、何が、一面識も無い御坊を、無理強ひにお留

め申して、大失禮。」

とぐつたり、と叩頭をして、

「何も此の櫻に免じて御許され、……鷺の尾に請狀はなし花の友、……とな。……最もまだ咲

きはせぬが、それ、もの言ふ花がづらり居ります、聞こえましたか、御坊。」

「はい、私は一向不調法であります、眞個に御風流でございます。」

「風流も可いけれど、あ、ぞくくして來た。」と身ぶるひする。

「酔覺どすせ。」

「其の見當や、……そろく引揚げと仕るか。」

と些と酔も醒めた様子で、

「えつと、御坊。之から暇へお伴をして、戀と無常の鐘の搦分け、ぐわんと遣るでんす。是非

ともにお附合。……」

「如何とも。萬事は、此の御婦人にお任せをしました。」

とて、松の姿に引添ふた、お岸を一寸振返る。

「一遍附合ふておくれやす、濟まん事。」

「はい。」

「お手柄々々、何事も君に限る。」と和八はお岸に細い目遣ひ、

「さて極つたわ。いづれ今夜は飲明さうで、身どもなどは構はん事やが、御坊は旅の御様子や。時間も北山とおはしまさう、が、酒の最中にお齋はむさい。前へ齋を一ツ進ずるぢやな。何もお岸、彼もお岸や。貴公、御坊を連れてな、千茂登は酒も可い、西石垣へ走んなはれ。此方人づれは噉で待つて、可えか、可えか。」

お岸が黙つて頷いた。

「伸！伸！」

と和八が喚く、と此の釣鐘の撞木は當つた。雷の奥は最う暗く、ちらくちらくと灯が見えて、人の影は無かつたに、廣場の隅の方から、ひよつこりと出たのは車夫。

「へえ、旦那」と若衆は東京を極める。

「合ばこか。」

と出家を祭して二三人、一度に言ふ。

和八が、じろりと視めながら、

「構はん。」と切つて放す。

「貴下は、構はんかてなあ。」

「大事おへん。」と屹と言つて、密と流した目遣ひは、對手がたとひ鬼神なりとも、歌の心は讀むのであつた。

「御免。」

と云つて、旅僧は、其のまゝ不器用らしく、もつさり乗る。

車夫が見て、

「お笠は此方へ。」

お岸がすらりと寄つた時、

「あゝ」と雛鳥が可愛らしい、乳母の手に抱かれながら、前刻持たしたと見える、握手にした風車を、これ、上げましょの仕方ぞや。

「大きに、」と莞爾すると、頬を合はせて、嬰兒に衝と接吻。
車はやがて、風車ほのかに白く、くるくと、四條の橋へ舞ひながら。

七

二人を乗せた合乗が、黄昏の小路を廻り行く状は、足繁き往來の目に、其の風車が蝴蝶のやう、美しい春の夢が、中空に霞を濛ふ、と髣髴として見えたのである。
豫て駄々良の名に立つた和八の我儘は珍らしく無い。見も知らぬ旅僧を引戻したのも、花の堤で打つかつて、盃をさしたと思へば、別に怪むまでもなし、又何事も無かつたらう。
が、和八の何時も入浸る……今夜も其處へ引揚げると云ふ、祇園の廓に柳櫻、一カと右左の、繩手の揚屋、大嘉と云ふのへ、直ぐに一緒に連れないうで、お岸に西石垣の料理茶屋へ、慥うして案内させて遣つたのが、事の起るもとであつた。
しかし其は、其の西石垣の千茂登から二人が歸る時である。

ゆきには、四條の西詰で車を返した。手を取らぬばかり、久しぶりの兄にでも逢つたらしく、些とも四邊へは氣を措かないで、

「其の風呂敷包お出しやす、私がつはけ。」

「飛た事を……荷にも何にもなりません。放すとまた手の遣り場に困りますから。」

「そしたら手な曳いておくれやす、ほゝほゝ、由良さんの居やはる方へ。」

「私などがお連れ申すと、却つて縁の下へ参ります。」

「何やかて構やへん……手の鳴る方へ行にますえ。」

と莞爾して、

「……此方です。」と言ふ。

千茂登の門は閉つて居た……。點いたばかりの電燈が新しく、裏を行抜けに鴨川べりを鳥の飛ぶやう、ばらく忙しさに女中の行交ふのが見透かされたが、暮合の戸は嚴重らしく鎖されたのである。

立向つて、思懸けない、と云つた風で、お岸は黙つてゐむだが、便なさうに、軒の柳が一本暮れかゝつた風情であつた。

「どないしたのンや。」

と扇の小間を三ツばかり開いたやうな橋詰の石垣を横に擴けた土手なりの一町、狭い家居の、丁と向前一寸した小さな床屋で。

店にまだ燈も點けず、硝子戸の上へ張出しの暖簾を掛けた、紺地の薄暗いのに、べつとりと濃繪の具で、辨髪支那人がまくり手で立掛つて、ト笄で撻めると、島田をがっくりと仰向けに、恍惚した顔の白さ、紅の蹴出し露出に、婦の椅子に掛つた處を描いて、白抜きに、へあんじやう取ります、健沈」と記してある。耳の垢を取ると見える。油でいためた汁のものに、けんちんの名があると云つて、之は酒落ではない、垢取長官の諱であらう。

此の折から、椅子の婦の、件の緋袴を不作法に横ちよへ絞つて、硝子戸から繪の如き唐模様で、頭も顔も、のツペらばうにヌイと半身を突出したのは、垢取の健沈。

目の前に並んで立つた、お岸と旅僧の道行振をじろりと視めて、何か分らず、突拍子な聲を出して、

「ばあ、ばあ。」と口を開く。

お岸は斜に見返つて、

「南京はんが、何か云うて居やはる。」と莞爾笑ふ。

旅僧は、お岸の言に、はじめて氣が着いたやうだつたが、

「前刻は。」

と言つて、其の支那人に會釋した。

垢取健沈、頭と手を掻くやうに、ぐらぐらと振つて、ニヤ／＼しながら、

「ばあ／＼ばあ。」

お岸は兩方を見較べて、

「貴下、南京はん知つてやはるか。」

「然やう、前刻ほど此處を通り懸りました節、大谷へ参る路を、此の店で聞きましたよ。で、橋詰へ來なから、四條さへ分らない一向な田舎もので、貴女にも飛だ御迷惑。」

と云ふ。處へ床屋の主人が、健沈に肩に並べて、黒籠甲の太い縁の、大きな眼鏡を掛けた鼻の下の長い顔を出して差覗いた。

小鼻へ皺を寄せて、づるッこけさうな眼鏡越しに、稀有な顔をして、

「千茂登はお客はんで充滿ですが。」と獨言の如く言つて聞かせて、めくら縞の前垂をだらりと締めて、其でも白の筒袖だけは羽織つて居る、昔の辻番が葬式に雇まれたと云ふ形。高足駄をガタ／＼と鳴らして軒下へ出ると、暖簾の前に椅子を一ツ、其の上へ安置して日に當てゝ置いたらしい、サボテンの鉢植を恭しく取上げて兜の鑑定と云ふ構へ、着入道のどけにかゝつた、砂埃をフツと吹いて、願を出して、撓めた處は、争はれぬ床屋の御隠居。

何と見事なか、と云ふ素振で、見せ着けながら、支那人の鼻の頭へチト前屈みに内へ引込む。

「ばあ〜。」

と唯言つて、垢取健沈まだ染々と視て立てり。

「あゝ、座敷が無いよつて、戸を閉めた……そしたら、大事おへん。此方へおいでやす。」

とお岸が頷いて立直つて、すらく／＼と行つたのは、間に板塀を隔てた勝手口。其處も閉つて居たのを、づつと開けると、事も壯な料理場で、七輪の火が、くわつとお岸の顔を染めた。

些と後れて、又會釋して、健沈の顔が暖簾の裏へ潜つた時、續いて旅僧も其處へ來る。洗方の若いものが、其の途端に大きな聲で、

「畜生め。」

平時も狙つて嗅ぎに來る野良犬だと早合點で、向ふ見ずに喚いた處。ト顔を出されて、

「ひよう！」と言ふ。

「違やしまへん、ほ〜〜〜」

「は、は、は、と板に居合す四五人が、聲を揃へて一齊に哄と笑つた。
 「違ひまへん、畜生は畜生やけど、麒麟云ふ偉い奴や。」と洗方は額を撫でる。
 「座敷はどないどす。」

「ぎつちりでなあ。」

「あ、おいでやす。」と、階子段の下の、広い廊下を通りがりの女中が見附けて、柵のまはり
 を、はた〜と急いで来た。

「ちやとお上りやす、どないなとするによつて。」

「さあ、貴下はん。」

「お連はん……」とお岸の背後の、宵闇に、法衣の姿を、初めて見た。
 「下駄を一足拜借が願ひたい。川で洗つて参ります。」

「ほんに、貴郎はん、草鞋どしたな。お三いはん。」とお岸は女中を呼んで、
 「小盥にな、一遍お湯取つておくれやすや。」

「はあ、可うおす。」と言つたものゝ、……四條の橋詰に柳があつた、禁札か建つた頃は知らず、
 既にして西石垣のお花が、本町筋の刀屋へ詰袖で推掛けた時代から、こゝらで洗足をする旅人
 は無い、と、女中はひよんな顔で當惑して、

「生簀で洗やはつたら何うどすやろ。」とうつかりボンとした真面目である。

「わや言ひはなれ。鯉やかて鮒やかて、之から食へはるのや、泥を突込んでどないする。」と板
 前が大に理を推す。

「かて、とらまへる時は漁師が跣足やないか。」

「近頃は自働車で網を打つ！阿呆らしい、早う汲んで上げなはれ、湯はどんどある。」と俎に
 柄を返して、庖丁を丁と入れた。

九

兎角して先づ此へ。……二人を通したのは段階子の傍に成る、六疊の茶の室で、内證の住居。

狭い處にぎつしりと、箆笥が揃つて、床には古流な軸物あり。長火鉢に鐵瓶が音を立て、猫の湯呑も見えた。棚の上には煉物の大きな福助、ニヤリとして、

「や、おいで。」と扇子を構へて出額で控へる。

長火鉢のさしむかひで、お岸が入口の障子を脊に、旅僧を、鴨川に縁側つけた小庭の方へ。二枚襲つた友染の大きな座蒲團の、下のを引出して座らせながら、自分は腰を浮かせつゝ、中腰で白い指で、拭込んだ火鉢の縁を弾き弾き、鐵瓶の湯氣で、風車のくるくると廻るのを、涼しい瞳で熟と見て居たが、

「預けますわ。」と云つて、其のまゝ箆笥の鑲へすと挿すと、はずみで又一つくりと廻る、上から福助拜見也。

之を視めて、

「乳母に抱かれて居なすつたは、和女のお妹御でおいでなさるか。」

「嬰兒はんどすか、妹やおへん、貴下もな、お世辭言やはつて。」

「世辭では無いが、何か、姉さんに、などゝ、乳母が然う申したやうに聞きました。」

「可厭や、私が、こんな勤めしとるはけ、母はん云ふたら、色氣がないやろちてな、姉はん云ふのやて皆んなが教へはるのどすせ。いとしおすせ。嬰兒はんやかて、母はんがなうて、どないしまほ、父はんもないのンやもん。」

「はゝあ、御親父は？すると、貴下のお連合は何うなすつた。」

「どないやら、分りしめん。」

と顔を背けて、

「向ひの内、耳の垢なと取つとりやはるかいな。」と寂しく笑つた。

「お待遠やしな。」

と女中が來た。

「茶々一ツまだ上げんてあ。と、別に火を取るつもりで、片隅にあつた、桐のナズ鉢を、トつき膝で、灰をならす。」

「私が入れよか。三いはん、此處の入れて段ないやろ。」
と茶盆を引く。

「座敷やがな。貴女、お會計もちやと濟ましやはつたよつて、最う明くのや思ふと、又這つて話しとりやはるんどすせ。何も成りへんえ。」

「繁昌で可うおす。」

「何時もこないな事ばかりありへんけどな。もう一遍、なぞ掛けて見ますかいな。」

「火も最う結構。」

と旅僧は居直つて、

「御混雜の處を、其に和女もお忙しい。又の事にしては如何で、私もまだ、然まで食事も急ぎませんから。」

「而したらな、此處でしたら何うどす、貴郎はん、お厭どすか。」
と、お岸があらためて陶はして言ふ。

「私は辻堂で差支へません、結構過ぎます。」

「然やつたらな、三いはん、此處にしまつせな、おかみはんには、御迷惑や云うておくれやす。」
板前の廊下の境に、襦袢を狭んで立膝で、斑布の櫛で、艶々した圓髻の鬘を掻きながら、前垂の端へ飛つかせ、飛つかせ、眞黒な狎をじやらかして居た、此家の内儀が、ひよいと、奴を引抱へると、絹布の裾をすりと来て、

「お岸はん、豪い濟まん事やなあ。」

「私こそや。」

「之はお客はん、龜末なや。」

「はい、お雑作に。」と叮嚀に會釋する。

内儀は二人の其の姿を、長火鉢の縦に見て、

「お岸はん、似合うたえ。」

「然やつたら、寧そな、蝶足にしておくれやす。なあ、三いはん、お取膳にするよつて。」

「どうも成らんな。」

「お爛も此處で。」と鐵瓶を傍へ下せば、

内儀が起つて、

「所帯は、渡いた。」

一〇

「いや、お酌では恐入る、手なんぞ細い事、瘦せておいでなさいますな、身體がお弱さうだ。」
と旅僧はしみく言ふ、膝も崩さぬ其の姿、脊戸に近い鴨川の水が、床下にさらりと算を走るやうな澄み切つた音を通はせ、幽かに搖れて、墨染の袖に響く。酒の香はゆるく電燈を繞つて、酔へる瑪瑙の如くに照らす。時に、チリくと千鳥が啼くので、盃の数も一ツく、孤家に珠数を数ふる趣して、お岸が掛けた半襟の梅の苔も、白く清らかに膚寒い。
京は底冷えのする處である。

お岸は、薄い膝に指を反らして、

「藥の絶えた事ないのえ。去年の秋の末頃です。お産してからな、尙ほ不快うてな、合間やないと、座敷へも出やへんのどす。此の頃もな、又半月ほど寝たのどすせ。どないするやろな、又瘦せた。」

と寂しさうに、願で襟を壓へたが、一片其の梅の苔を、皓齒で嚙むやうに優しく見える。

「野晒のやうにおすやろな。」

「野晒とは？」

「草の根際に、ボキンと骨が散ばつて、目の穴から薄が長う生へるのえ、描いた骨がありますやろ。」

「は、あ、骸骨。」

とつきもなく笑ひながら、

「卒塔婆小町と云ふ事か……詰らん事を。眞に透通るやうでおいでだが、大丈夫骨は見えませ

ん。」と、をかした事をまじく〜と殊勝に言ふ。

「然やつたら、お酌さしておくれやす。私な、そないにな、何時までも生きて居たいことないよつて、肥りたいことはおへんけどな、骸骨やつたら、貴下はん、氣味が悪いやろ思ふのえ。

御出家はんの目から見やはつたら、私たちの島田やかて、齧體に見えますやろ。」

「不思議な事をお言ひなされるね。何うして、名僧知識とでも云ふなら格別、私如きぢや、在家の衆より、十倍も綺麗に見えます。殆ど天人かと思ふくらゐで。」

「言うてどすな、可厭……こんな處へ、無理に來て貰ふたはけ、せう事なうて、然ないに言やはります。」

大谷へ入つてどしたら、矢張り骸骨に見えるのどしやる。」

「附かん事を聞きますが。」

旅僧は改まつた體で居直りつゝ、

「あなた、何かそんな事で、氣に成る事でもありますか。」

「始終どすせ、それにな、今日や。」

「今日と云ふと？」

「貴下にな、彼方でお目にかゝらん前にな、今日は大谷のお墓所へおまゐりをしたのどす。」

「あゝ、あのお連の方は、それでは、御一統。」

「違ひます……私一人、嬰兒はんも連れてやおへん、嬰兒はんはな、おとなしう、よう家で遊びやはるけれど、時々……病氣に成らつたやうに、私の後、追やはるのえ。然やと、誰が何云ふて賺いても肯かはりへんのん、直きに乳母やが連れて來やはる。」

揚屋でも何處でも然うえ。今日はな、私一人で行つた。又病氣が出て、わや言やはるよつて、乳母が抱いて、連れて來やはつた處へ、私がお参り濟まいて、歸る路で、……あの、花輪櫻の根際で、バツタリ逢ふた。

序や、と龜末なはけ、祇園はんは鳥居で密と拜んで、二軒茶屋の前へ來たら、玩弄屋の店で、岸はん云うて、其處の主人はんが呼びやはる。

而してな、此の間のお錢返します、こない言ふ。
 際に勘定したお剩錢かいな思ふたら、然やない、わやくして、
 言やはつた。何や、私、知らん言ふたがな、漸つと分つた。」

—

「其の前にな、夜さり祇園はんへお参りした其の歸途どした。同じ
 にな、何か買うてと思つて、視めて居た。他所の上はんがな、五
 て入らはつて、護謨鞠の彩色したのン幾干や聞いて、お引き
 せん、言ふて果しがな。餘り可い服装もして居やはらん上
 引いてお上げやすえ、私が云ふたら、可うおます、お持ちやす
 な。」

つたんえ。

「實際にな、手遊屋が、平時のやうに書出しよこした。其をば
 したは、其の事どつせ。」

私が口利いて、上はん引いた分をば、私の方へつけたよつて、
 いはけに、其のお錢を返しまほ云やはるのえ。

然やつたら、別に何ぞ貰ます云ふたけれど、澤山ありましや
 やつと嬰兒はんの屋根葺いた手遊箱やよつて、どれも取て歸
 と思出した。

有り觸れた風車が一ツもないのどす。よつて、之をば。」

と言ふのが箆筒の環に、……ト一ツ平手で、くるりと廻はして、

取つて出やうとした處へな、二軒茶屋から騒ぎまふて、前刻の
 揚屋へ歸る處やけれど、お岸、あんたの顔見たら、清水はんへ
 参るよつて、どないしても一

緒に來いと捉まへて斷しはらのンえ。

然やで連れられて行んだのだす。貴下はんには、圓山で逢ふたは、其の歸途どすえ。」と、顔を見ながら、優しい聲して話すが、やゝ口早には聞こえるけれども、春の風のありとも見えず、そよいで花を渡るやうで、聞くものゝ坊主頭にも、姫小松の縁を被がす。瞻ると近優りして、一緒に被衣の中へ入つて、霞に包まるゝやうである。然るにても涼しき目ざし、心も言も、一點の曇もなしに、眉のあたりに透通る。

旅僧はうつかりして居た。

「何か、其の途すから、氣に成る事がありましたか。」

「然うやおへん。其はな、大谷のお墓所で、まだ嬰兒はんにも逢はん前どす。貴下、床店で四條の橋訊いた云うて笑やはつたな。そしたら大谷もはじめてのお参りだしやる。」

「如何にも、まだ御縁がなくて。其癖、随分、諸國徘徊ふて歩きますのに。はゝあ、其處で。」
「あのな、大谷のお墓所云うたら、何や知らん、寂しい、廣い、心細いな、なぞへに高い山に

成つて大きな樹ばかり、じめんくして、陰氣でな。盆やら彼岸やらでないときへ、誰も入らばらんよつて、前刻やかて、梟鳥が威いて居た……

「私な、其處で見たんえ。野晒をな。」

急に美しい眉を擧めたと思ふと、手先を引いて、淡雪を厭ふ風情に衝と片袖を顔に翳す、ト薄紅梅がはらりと溢れて、愛くるしい緋鹿子の、細い筒袖が二の腕透く。鶯も來て宿れかし。

旅僧はホツと云つて、

「之は熱い。」

と一口飲み、

「お色が好くない。一ツおかさね。阿女なか／＼飲けますな。お見事だ。いや、體も圓いと思へば、手前なぞ、木賃でします木の根の枕より頼母しい。何の、阿女、向ふの床屋の垢取りの本國などでは、昔あれに漆を装つて、盃にして冷酒を飲んだものだそうござる。」
と聊か酔つたか、串戯な口ぶりで、

「本山、別院の緞子金襴のお歴々は別だ。私のやうな行脚坊主と、お相酌を下さるお心持で、卵塔場の骸骨如きを更に氣になさる事は無い。」

大丈夫、阿女などは百年の後、焼いても琅玕と申す珠に成る。」
と事もなげに言つて一盞、手酌で参る。

お岸は聞いて嬉しさに見えた。

「琅玕云うて、どないもんでしやる。」

「あの水晶へ紺青の浪が懸つた色で、龍宮では簪にする珠です。」

「何云やはる、晴がまし……私が何で。」

「いや、私が習つた御經には、ちやんと然う説いてあります。間違ひはありません。」
「然やつたら。」

と火鉢の角へ、蒲團をづらして、

「御坊はんは何のお宗旨とすえ。」と少し意氣込んで、目を睨つて聞く。

旅僧ハタと額に手を當て、

「どれも少々……私などが拜むに及ばぬと云ふのはありませんから、何宗でも構ひませんな。」

「あんな、私をば、其のな、貴下のお弟子にしておくれやす。」

「弟子とは？」

「其の珠に成らidemな、死んだら、恐らしい野晒に成らん御經を教へておくれやす、私、可厭やわ。」

と拗ねたやうに、肩を振つて、

「大谷の、墓守坊はん……」

「教へるも何も、骨が玉に成る事は、却つて今、阿女から私が教はつたばかりなのです……其のまゝ、其のまゝ。」

と頷いて、お岸の乗出した座を押戻すやうに片手を舉げた。

「其のまゝ、そつとして置けば結構なんです……其で、何か、墓所の坊さんが、然やうな事を言ひましたか。」

「はあ、言やりました……私な、けたいで成らん。……山門の中でもな。貴下はんがおいでやした、あの敷石の許から直入るのどつせ。」

前刻、私が門へ入るとな。松の樹のすらくと並んだ下を、寂とした廣前を、七ツ八ツばかりの可愛らしい女の兒が、大な籠をば脊に負ふて、焚くもの拾ふたのンやら、籠の底に、輕うな、枯た松葉と松球を少し入れやはつて、一人で、いとしけに來やはつたんえ。

南禪寺の境内やつたら、あのな、一ツ空へ飛んで行て、一ツだけ残つた大きな石燈籠のまはりやなど、二三人も落葉掻く兒が何時も居て、朝夕、鐘を聞く時見るけどな、一寸々々行くのに、大谷の門の中では、はじめて逢ふた。

誰も居やへん。私一人どしたんえ。

寂しいのンやろ、母さんや父はんは居やはらんかいな思ふて、私かて心細うなつたんどすせ。

お錢少し、細麻などお買ひやすや、云うて手に渡いた。

小さな手々を、顛巻した頭へ上げて頂きやはる。

ほろ／＼と涙が出てな、目々押へて別れたのンえ。

少し行て後を見るとな、お聞きやす。……何處に居た知らん、山門の柱の裏から、荒布を揉むだやうな衣着て、蓬しまに髪を捌いた、まだ年の少いな、色の眞蒼な女子が出てな、引手奪つて、其のお錢をばカチリと石へ叩きつけた。音が聞こえたのどすせ。

措きなはれ、畜生の手から、汚れるえ……を食してかて人間や、……云うて、する／＼と其の兒を引いて、門の外へ去て了た。

何や知らん、怪體な思うてな。……腹の立つより悚然として寒かつたンえ。

鼻烏が啼くやろな。……今のが煙のやうなものないか、松の樹ばツかして何にも見えん。

呼吸せいてな、急いで行た。式臺へ廻つて、頼みます云うて、遠い處から、年寄らはつた、

坊はんを呼出してな、お墓所へお經あけに一緒について来て貰ふたんえ。

杖を支いて、びしょ／＼と来やはりますやろ。水を汲んで……手桶持つ言やはるけれど、お足は危うてあかんのだしやろ。お華は持つて行た。」

「お話の中だけれど、お墓はどちらか、御兩親の？」

「父はん、母はんのは他にあります……今日お参りしたのな……仲ようして居た……友だちどす。去年、夏なくならはつた。」

と怖れたやうで差俯く。

「美しく人だな、華がたんと好きやつたよつて、私な、紅梅を持つ行たえ。坊はんが持つて遣る言やはつたが、其の人に手向けるやよつて、私が持ちたうおすやろな。」

罽伽桶と、梅の枝、両手に提げた、お墓は路がありまつせ、青う苔が生えてゐるやろな。

杖に縋つて、珠数を繰つて、

(轉びなや、轉びなや、轉んだら三年坂ぢや。)

と口の中で言やはります……三年坂はな、轉ぶと死ぬと言ふ處だつせ

私な、お足が堅う成つた。梟鳥の啼く事いな。

段々、樹林が深うなるはけ、其の聲に、暗い處へ呼込まれるか思ふたえ。お墓はな、少し小

高い許にあるのんどす。何處から落ちて、来るやろな、鳥が羽で振撒くやら、香立も、華立も、

黒い木の葉で一杯どす。

坊はんがな、杖で突いて拂やはるはけ、止めておくれやす……

いぶつたら地の下でも切なうおしやる思ふはけ、線香も持つて來んのどす云ふてな、そしてな、あの柄杓で水を汲んで居た時どすせ。

何や知らん、ちやと背後の樹の陰で、可厭な聲でな、う／＼犬が吠えるやないか。氣疎う

吠える云ふたらないのんえ。

(何や、和尚はん。)

私立つて居て然う云うた。

(しっく)と口の中で獨言云うてやはる。

犬に聞こえるかいな。

尙と吠えまじやろ……恐ろし成つたのんえ、ホーく鳥は最う啼きへん。

(何や、和尚はん。)

(亡者が来たかのう。)

(可厭。)

(然したらお客ぢやが、やくにも立たぬ狐か狸が來せたであろわい。一遍見て遣ろ。しっく、轉びなや、轉びなや。……云ふてな、びしょくくと草履で行かはる……)

私もな氣味悪く、附いて行た。人を見たら尙と吠えるのどすせ。狐と相の子やおへんのかいな、耳のツと尖がつた、鼻の細い、焦茶色の犬だつせ。鋭い目して、脚で蹴たり、鼻頭で嗅

いだり、くるく吠え廻ふてどす。

あッ、云ふた、私な。

と肩を反らして、後へ手を支き、

「(野晒や!……)」

(しっく)云やはつて、坊はんが杖の尖で、ぶるん、震へながら、地面叩かはつたによつて、犬は、ちやと宙を飛んで、退つて、大な杉の樹の眞暗な根際から、天狗はんの面見たいに長い鼻のさき出して、目をビカくと睨むのどつせ。……凄かつたしな。

野晒はな、密と覗いて見た。何うどすいな、額が岩のやうに突張つて、目がぱっくり握拳見た穴を明けて、上願も齒も一ツも齧がつて居んのどす……半分、顔をば打缺いたやうでな、薄べらにめくれ返つて、頭の處に、ベツとりと爛れ朽ちて、皮が絡つて、めらくくと、其が慥うな、後へ退いても藍の色して、眞蒼に、ポーと火が燃えたやうに見えるのんえ。其の残つた皮からな、何うどすやろ、すらくと、眞黒な長い毛が生え伸びて居てな、青苔の上へと畝を打

つわ。

山門で見た、蒼い顔した女子の、首だけ飛んで来たのやないか思ふと、よろ／＼と足が窘むだ。

飛んで返つて、

(どないしよ!)……と其の貴下、友だちの墓へ絶着いた。

(鹽梅が、若い女子や)……獨言言やはつてな、其の和尚はんが、ぐツ／＼野晒を突き散らかはつた。

杖の尖返いて、齒の無い口をむく／＼と動かいて、クン／＼鼻で嗅がはつたんえ。」

「可厭な事をする、……氣障な奴だな。」

と旅僧は思はず、咳くが如くに言つた。

「はあ、然うどすやるな。」

お岸もうつかりしたやうに言つたが、冷かに罵つた今の言葉を、嬉しさうに、旅僧の顔を見

て、火鉢の縁へ嫌やかに肘を掛ける。

一四

「和尚はんかて、何やら怪體な、化けやはつたやうにおしたえ。……」

然やつて、杖の先嗅いで見やはつてな。

(ふん／＼、まだ生々しこつちや。犬めが食缺いたやろが、手足は何ないしたぞ。……何處か

ら唧へて來せたやろ。適々はある事なが、澤山はない珍らし事や。

なあ、和女、)

云ふて、可厭や!其の野晒をな、和尚はんが又杖で突いて、私が方へ轉がいた。ぶわ／＼と

な、動く上を、蒼白い煙が地板這ふのどつせ。蛞蝓がべた／＼と附着いて居たえ。

(供養して上げなはれや、何ぞ縁あつて、和女の傍へ來たのやろ。)

私、手で拂ろた、袂被つてな。」

と俯目に、又密と其の袖を舉げたが、仇氣なく愛らしく、且つあれに見えた。
「和尚はんが、くなくと頬邊膨らしはつて、

(嫌ふて退けたら、妄念が怨むに、祟りがあるぢや、篤になろまい。何やつたら、此の墓の地、一遍杖の先で、穴明けよか。女子の少ツこい骸骨や、土蜘蛛ほどの破目やつたら、ちやつと隠れる。……其の華手向けて、水掛けて遣あされ、仔細ないこつちや。)

言やはるとな……身構やはつたえ。ガツしりしやはるのンやが、ぐなぐと、よほける腰据ゑてな、竹槍見たいに、杖を取つて、突懸けはる。」

言ひつゝ、吸掛けた、黄金の細打の煙管を斜に、しつかり取る手が震へたが、屹と見た目は露を帯びた。

「私、口惜しはけな、……其の杖を、はつと、手に持った枝で拂ろた、室咲やよつて纖弱うおすやろ。ほろくくと紅梅がこほれたはけな、アツと思ふて、袂で包むだ。
(留めて貰ひます……、お墓のは美し人だつせ。一緒にに入れて、どないします。)

と、ついしか血相したやないか。

ニタリ／＼笑やはつてな、

(美し人や、和女のやうにか。淺間しい。……其が迷ひぢや、墓なは男か、女子かの、業平でも小町でも、死んだら、青膨れぢや、此の體圖ぢや。……分けても此方衆は。)

言うて、私の風つき、じろくくと見やはるのンえ。

(多い事罪を造るよつてにな、尙ほ汚穢い、尙汚穢い。けえく) 嘔するやないか、何うどすやろ。

(それ其の、半分皮がめくれて、大な目がうろ抜けて、十筋の長い毛がすく／＼と見える。あれ／＼齒齧が透くぞ、舌苔に蛭蟪がだらりと着いた。

私な辛うて辛うて成らんよつて、聞かぬ振して手々合いて拜んで居た。あの、言はる事、キリ／＼と骨へ刺つて、わなく／＼震へて來た。かなはんはけな、顔を隠いて、衝と走つて遁けたんどつせ。

(はれ、佛の道へ駈けて行く……其處で悟れ、轉びなや、轉びなや女子)

言うて、ホー、鳥のやうな聲出して喚かはつたんえ。

其からだす。貴下、氣が結ばつて、胸の中をな、細い糸で括るやうどつせ。もうな、どない

なと成れ、思ふけれど、……どないしたら可いかわらん。

私な、そないな和尚はんに、言はれんかて、果敢ない事ばかり有るよつて、後生願うて忘れ

んのどすせ。然やかて、死んでから、鬱陶しい骸骨に成る言ふ宗旨やつたら、殺されたかて拜

みへん。

貴下はん、然うやない言ふておくれやして、私、ほんに嬉しおすえ。

けどな、あの、野晒に成る方が眞實でおへんやろか。私などは、尙ほ汚穢い言やはつた……

分隔てせなんだらな、たとへ、死骸をかくしたかて、杖の先で、お墓の穴突つかれて、あの、

蛙蟪べつりの、まだ青い顔と、一ツ地の下に寢にや成らんえ、なあ。

袖を几帳にひつたりと面を蔽ふ。

「大丈夫、私を受合ふ。其だけなら、弟子にもしやう。」

如何に美女、杖を拂つた腕の雪に、其の紅梅の散る色見たるか。

一五

横雲がむらくくと、美しい京の夜を、末濃に颯と一刷して、其の中に、柳の糸をすらりと渡

した、東山は被衣を透いて、眉の覗いた佛である。

山の端の其の姿を、月の氣勢の薄あかりが、白銀の色の中に潜め、冴えた淺黄の光を擴けて

裏から宙へ浮き出させる。山懐の眞暗な樹立の、濃い緑の綾が透いて……白衣の御姿彼處に

おはす、……清水のあたり青地の錦の帳が深く、月の影が逆さまに柳へさすかと、其の空ばか

り澄渡る。

色電燈と、軒行燈、店灯で、八重に七重に丹に碧に、はた紫に彩つた、祇園町、先斗町、宮

川町の夜の空は、鞍馬の使、比叡の音信が、眞魁に花の廓へ……風に、雲に、花の模様を送

り来て、淀んだ露のただずまひ。星は曇つて眞珠のやうで、鴨川の水の朧の中を、紫濃く、千鳥の羽たゞく音が通ふて、冷たき小石に觸るときさへ、ちらく灯の紅が走る。

蠟燭の櫻、障子越。

闇には迷ひ、月見では、悟るもよから、然りながら

私や朧夜何とせう、結ほれ解けぬもつれ髪。

二階の水調子の糸を渡つて、祇園のお岸は微酔の小袂を投遣に、片手を忘れた懐手。色も直つてほんのりとした微酔機嫌で、先斗町の川岸から、茶屋小屋の裏を細手へ通ふ近路の、竹村橋へふらりと出て来た。……狭い橋で、並ぶと欄干へ擦れくぐらる。で、離れた前へ、日和下駄の音をかたぐ、と其も蛙の啼くやうな、眞黒な姿は旅僧である。

「一寸お待ちやすや。……案内者の私が後に成つて、何も成らん、貴下、一人で然やつて行かばつたら迷子に成るえ。」と細り優しいが訝えた調子。
立留まつたやうであつた。

「まあ、此處だけは仔細なさうだ。橋は一條です。」

「私には二條に見えるのシえ、ほム」と花やかに笑つて、左の欄干へ、ふらりと寄る。ト遠あかりで、臉もほんのり、そよぐ川風、軽い吐息。

「酔うたかいな、私、貴下はんの言うておくれやしたお庇やな、嬉して、かなはんよつて、酔うたえ。澤山飲んだえな。……」

あの、お墓に居やはる人が亡う成らはつて此方、慙うした事一度もおへん。……太嘉へ行って、お客はんは逢ふたら、又どないだすやろ。

チャラく電話かけて急かしやはつて、私、嫌ひや。貴下、もう行かんと置きや。」
旅僧は、がたくと引返した。

「阿女が承知で、参らんで済む事なら、其に上越した事はない。此のまゝ御免を被つて構ひませんか。」

「構ひます、構はいで何ないせう……貴下、御免被つて、何うしやはるシえ。」

「前刻の人に、ことづけを阿女に願つて、私は固より行脚のものです、それ相應に参ります。」
「一人でな。」と軽く云ふ。

「誰と一緒に歩きますな。」

「まあ、阿呆らし、と莞爾して、

「然やつて別れるほどやつたら、早う吸へ行にまつせ。其が可厭やよつてにな、此處で思案し
とるのどす。薬湯の町の家へ行たかて、座敷へ出ずと居られへんし、何ないしよ。あゝ、
と白い手で胸をたゝいて、

「嗟峨へなと走ろか。」と、串戯らしう眞顔に成つた。

「まあ、そんな事言はないで、兎に角、其の大嘉とか云ふのへ参りませう。」

「然やつたらな、手曳いて行ておくれやすな。」

「可厭どすやろな。」

お岸はくるりと身を返して、脊を欄干に凭す、身動きと水のそよぎに、はらりと解ける片袂
を、膝で合すと、軽い駒下駄の音がした。

「可厭も何ありませんがね、……慙うやつて、揃つて歩くのさへ、晩方とは違う。あの、
廣告の色電燈で、怪しからん寫眞を極彩色で見せるやうに思つて、四條の橋を通るのも、其で
遠慮したんです。……まさか、手を曳いて、……渡初の尉と姥ではあるまいし、」

と詮方なさうに笑ひながら、

「不躰ですが、決して可厭と云ふではない。さあ、出掛けませう。」

「一人でおいでやす、私、知らん。」と、爪楊枝も含まぬが、俯向いて澄まして居る。

「ぢや、何うするんだね。」

「これから向ふへ渡つたかてな、私、大嘉へは一緒に行かんえ。可厭らし、あの、鳥はな……」
「鳥……とは？」

「私たちを待つてやはる、大竹はんの事だつせ。翼擴けて鴨川べりを、はた／＼飛舞やはるによつてや。」

「成程な。」

「聞いておくれやす、晝間もな、外套の袖の中見たら、私と同じ亂立のお召の衣服着て居やつた。紅いものは入らいても襦袢やかて、同一柄の友染え。後から／＼誂へはる。裾模様でなかつたら、初手見た時縞が合はんと、六條の家へ揚屋から使ひ走らいて、上下同じ柄をば取寄せて着替へるのんどす。私、座敷へ行くのは可厭や。」

「阿女が可厭なら丁ど僥倖、……私は此で失禮します、何分其の方に願ひたい。」

「然やつたら連れて退いておくれやすか。」

「串戯ばかり。」

「貴下がツ、と去なはつて、後で私、尋ねられたら何と言ふ。」

「其處は随分宜しきやう、坊主は千茂登の下駄を穿いて、駈落をしたとでも何とでもな。」

「阿呆らし……そないな事云へますやろか。でもな、眞個駈落やつたら、嵯峨へ行にたい。」と密と手を、其の旅僧の胸に當てた。

あしらひ兼ねたか、其の手を庇ふやうに、槍笠で軽く壓へて、

「困つた嬰兒はんだな、何うして下さる。」

「私もどないしよ。」

と鴨の水の流るゝやうに、綾が靡いて肩を振る。其の姿が、朧の中に、黒く艶やかに水際立つた。

東山の頂は、刈あとの去年の薄も穂に出るやうに、白い雲がちら／＼動いて、黄金に淀んだ霧が淡く、月の出汐が颯と蒼い。

時に風が渡るやうに、すら／＼として角のない、しかし、威力のある瀬が響いた。

二人は言合はせたやうに、フト聞澄ましたのである。

旅僧は俄然として、ものに悚然とした状であつた。

「や、潮がさすか。」

「何言やはる、ほゝほ。」

と小さく笑つて、

「東の方はな、時々そないな事言やります……隅田川やおへんえ。」

「之は……いや、恐入つた。」と聲高に之も笑つて、胸を反らす、ト手が放れる。

「疏水のな、瀧に成る落口どす……凄うおすえ。颯と上から翻つてな、向ふ岸の、あの暗い中が此の音え。あれ、橋が一寸明る成つた、……お月はんが出やりますやろ。」

「此の中に瀧があつたら、嘸好い景色だらうね。其を見ながら、さあ、早く行きませう。」

「些とも可い景色やおへん、恐ろし……澤山、人が落ちて死にやはる處やよつて、此の橋も寂いのどす、怪我にでもなつたら、最うな、どないしたかて助からんのえ。」

と仲上るやうにして、屋根の黒い、山の白い、祇園の岸を透かすやうにしたが、
「あッ、然うや。」

衝と又旅僧の袂を取ると、駒下駄がコロリと鳴る時、幽かに山の端の光が射す、細い片頬に蒼みが映つた。

一七

「私、彼處へ行て、疏水の瀧へドブンと入ろ。……貴下に分れ後やつたら、死ぬと蛭蟪の附着く汚穢い骸骨に成ると可厭や。然やはけ、其のな、琅玕の珠に或つて、龍宮の簪に成る言ふて教へてくれはります貴下に見て居て貰うて、水へ入つたら嬉しおつせ。」

何やして居たら、別れんと成らんよつてな……私、ちやと一遍死のか。」

と言ふが早い、裳はらく、橋の上を走り出す。

「困らせる。」と聲を懸け、串戯とは知つても棄置かれず……檜笠を確乎と取つた。片手で追縋つて袖の端をぐいと引く。

と黙つて、故と焦燥たやうに、水の上の姿を曲ると、菖蒲の影を流が揺る……其の俤は白い花、

……竹村橋は臙である。

「然やつたら、はじめから、手を曳いてくれはつたら可いやないか。」

「畏つてござる。」

と風呂敷包を引掛けた手で額を撫でた。

「まるで、之は、駄々兒だ。」

「憎らしおすか。」と莞爾する。

「いや、何ういたして、」

「わや言はいておくれやす……誰にかて最う私な、去年から甘える人はないのンえ。」

と潜然としたやうで差俯向く。寂しい姿を熟と視た。旅僧もフト黙つて、其のまゝ姿が重つて、

橋のやがて半ばを渡る。

ト僧が行く……左側の欄干に、ぴたりと着いて、悄乎と一人、髪が臙に、額、頸元に鬮掛つ

た、顔も黒い影の婦がイむ。

此の橋には、藝妓、舞妓の口からながら豫て瀬が出る申す……分けて疏水の落口には年々人死が少くない。間一町とは隔らぬが、四條は燈の花の大路で、此方ば一條の松並木……祇園と先斗町と同じ流れも、瀬が替つて、膚合ひの遠つた従姉妹同士、一ツ棟に棲みながら、母家と別享と渡殿で離れて、つひ雪洞を黠しても、東山の月雪に往來の出来る處なのに、……螢でも飛ばないと、滅多に雙方から往來をせぬが、雨の夜に一ツ渡る提灯などは、真葛が原へ狐の飛脚が行くやうに、三味線を弾きながら、舞ひながら見て怯えるくらゐ、で其の晩など、四條の晝芝居が夜へ掛けて、まだ匆ねる時刻でもなかつたのに、人らしい形も見えぬ處……一目之を見て、お岸はハツとしたらしく、旅僧の廣い袖に、身體を隠すやうにして、肩を窘めた。

其の時、ふらくくと、……僅かな風にも心許ないまでに、欄干を力に立つて居た婦が、擦違はうとする旅僧を見たと思ふと、ぐなぐと成つて、橋板の上へばつたり支いた、膝も襦袢で、其處へも髪の毛がさらりと落ちた。

黒い繩の、朽ちて千斷れたやうな中に、節の高い、骨かと思ふ兩手を支いて、ほつと切なさうな太息を吐きながら、

「お助けをば願ひます、旦那様。」

と言つた、聲はまだ若かつた。

「内の人に棄てられます、小兒等は煩らひます、お慈悲をば願ひます。」

「御報捨します。心ばかり。」

様子を見ると、……早や懷中を掻探つて居た旅僧は、しばらくも投げても興へず、及腰に手を伸ばす。

「はい、はい、お嬉し事でござります。」と云ふも震へながら、押頂いた、が、一枚の紙幣で。

渡すと、見返りもしないで、旅僧はづか／＼と通る。

驚いたやうに、フト髪を捌いて欄干より低い處に、足許を這ふばかり、低く擽けた其の額は、何故か、藍のやうに、眞蒼にほつと見えた。

山の影か、橋は來た處を半ば、出汐の月をうけて、此の邊から疏水へ掛けては、露も次第に暗いのであつた。

祇園の噺、大和橋上る處大嘉うち、お久類と云ふ赤前垂。腰も膝もほつとりものが、ちらめく蠟燭の灯に、細い目で、

「お岸はんはな、貴下、一遍家方へ歸らりましたえ。」

「家方へ歸つた？何や云ふて、……阿呆つくせ。」

と奥二階、下階から通ひ口の眞正面、床の間を左に取た眞中に、桐火桶を二個左右に控へ、胸を張り、袖を擴けすて、兩手を大の字形に當りながら、二人づゝ、四人の舞妓を兩の袂へ、押包むだ如く引附けて、藝妓をづらりと居流れさせた、自から號する鐘に、五色の綱を曳いた和八大盞、四角な顔に角を立てゝ、

「私が今、此の坊様の迎に出た時、一緒に入つて、茶の室の八角火鉢の根際で、スバく煙草喫んで居たやないかい。……と目を据ゑる。

「然うどしたけどな、お座敷へ出るやよつて、……着るもの着換へて来る言やはつて、ちやつと家方へ去なはつたんえ。」

「然よか。」

何か氣拔けのしたやうに合點した。當人の和八は氣着くまじ、飲酒んだ氣競ひに羽織を脱いだ、襲ね小袖は、上下對。鼠地に藍と紺の亂立のお召縮緬、お岸が着て居たと、寸分違はず……座に着いたばかりの旅僧に對して、故と居座を正したは可いが、顔ばかり正的に据つて、酔崩れた膝から溢出した長襦袢は、雪輪崩した笹の葉で、恰も可、紅氣が無いのであるから、お岸の其と同一である。

旅僧は蒲團の上に、腰法衣に手を置いて、其の體を黙つて視た。

渠は床の間に直された。

何の意味も無いのであらう、壁には竹林の七賢と云ふ……大幅が掛つたが、點連れた酒の海の不知火に、賢人の顔は、髯が流れて皆赤い。

青銅の花瓶に、天地人と云ふ活方で、柳が添つて、可哀や乙女椿が、黒板塀忍返しの妾宅へむざと捻込まれた風情に見える。……草も木も、わが大君の國なるに、一刀流は殘酷らしい。

其の傍に、檜笠が、置ものゝ體にボンとあり。

それ、來たわ、と言ふと、待構へた和八が、藝妓まじりに、ばたくと下階へ下りて、お岸と二人が柳の暖簾を潜つた處を、燕の巢も崩るゝばかり、もの騒がしく出迎へた。

念も入つたよ。中戸口の土間に置いて洗足盥の用意があつた。

「草鞋や無いのか。」

「千茂登とか申すので穿替へて参りました。」

「此方は穿違へた、わはゝゝは。」

と機嫌よく笑ふと思ふと、

「湯も沸いてある、折角ぢや、お洗ひ、」

と極めつけて、

「誰なと洗足を早う汲めや。」と大な聲。

樓では逆らはぬに極めて居る。

「あい〜。」

此の間上櫃で、雙方が猶豫つた。

「何や、貴下、お足お洗ひやす事ないやないか。」

と吉鶴と云ふ姐株、公園の群には居ないで、新に加はつた年増の藝妓が、立ちはだかつた鐘

の脊越しの松、黒すんだ衣裳で覗きながら、氣の毒さうに然う云つた。

「黙つて居なはれ、門に立つ坊主どもが、之から大盡附合ぢや、其の足洗はすが何ないした！」

と些と聞こえよがし。

「はい、はい。」

頷くやうに叩頭して、背後向きに、風呂敷包を持つたまゝ、腰を落すと、青疊に籠行燈。其

の一段高いのが、浮き上るやうに見えて、思の外、掛ける處が低かつたので、もろに、尻持を

トンと支く。

「あれ、」

とお岸が小褌を狭んで、

「おつかまへやす。」と入身の肩、盥に枝垂るゝ柳の姿。

赤前垂の裳を曳く、淺黄の蹴出、圓い手で、お久類が差出す籠行燈。

盥の中には僧の足より、お岸の手さきが白うちらめく。

「わは〜〜〜、」と唐突に笑ふと思ふと、和八が自分に檜笠を引取つて、

「さあ、お上り。」と言ふが早い、背後に居た、其の吉鶴をドンと突いて、壁によるめく襖隙を、どたばた二階へ駈戻つたものである。

「頂戴、はい、頂戴します。」

旅僧は珠数をこそ手に懸けぬが、べろりと成る袖を背後へ刎ねて、鼠木綿の膝を四角に、床の間を脊負つて端然として、藝子が指した小盃、肩を斜にして、乗出した様子は、殊勝にも見すほらしく木賃の夢に重齋の體がある。

和八は横推しに友染の蒲團を摺つけ、

「やあ、措けい。」

と其の盃を獻す藝子を留めた。

「駈着け三杯云ふは天下の相場ぢや。そないな、舞妓が欠伸したやうな、ちよんほり猪口を何うするのや、」

と傍に座つた一人の、舞妓の蠟細工のやうな耳元を平手で撫で、

「なあ、こないビードロやさかい、欠伸の風鈴や、鐘流の此の硝子盃で参らう。さあ、御坊、と忙しさに、……前にあつた硝子盃を二ツカチリと合はせて、

「其で、御坊一ツ呼吸せずに頼むでんす。」

「はい、え、一時に二ツで頂戴をいたします事。」

「ビールあがりまつかないな。」と仲居が前垂の膝を其方へ。

「そないな泡沫立つた茶、何するぞい。御坊や思ふて、お茶湯申そと早合點でだけつかる。然やないわい。」

吉鶴、……例の酌や。」

と睨むやうにじろりと見る、ト其の女が心得て、ブランデーの罎を取つた。又一人が白焼の水差を揚げて、蠟燭の灯にちら／＼と、燃出る八ツ口、カッ散る袂、いづれ劣らぬ祇園の花が、酒と水とに色を分けて、二人が両方から、するりと寄る。

「御坊、見なはれ。」と言ひながら、揃へて両手から衝と酌がせて、なみ／＼と雙の硝子盃に湛

へた。

「可い。」

大な聲で、頷いて、控へさせ、

「佛蘭西では憊うして飲む……御存じかも知らんが、巴里で遊女を買ふ時、儀式で之を遣るでんす。……私は一昨年から、去年と行て居て、や、も、立續けに遣りつけたで、猪口などでは、とんと叶はん、と胸を眞面に立て、横柄に云ふかと思ふと、ガツくり俯いて、頭を掉つて、
「東西ぢや、東西ぢや……呼吸せずにくつと一口、誰方も其にて、お目留められ御一覽。」
軽口重々と喋舌るが疾いか、二ツの硝子盃を一口に、水と酒を一緒に引いて、眉を蹙めながら眞仰向の煽切。

「ふう、」

と吹いて、

「一滴も、それ、溢さぬ處を御賞覽。」と云ふ唇から、垂々と、いや、だらしなく胸へこぼれて、

長襦袢の笹の露。

舞妓たちは横を向く。

「ほん、そないにしてお飲りやして何うもないか。」と仲居は向直つて眞顔で云ふ。

「毒え、」

「なあ……」

と藝子は二人で、和八に云つて、……目はしんせつに僧を見つゝ、其となく、留めよ、と教へる。

「何が毒や。ぜい裏で黒女買うて、鯨を生づくりで食ふ鐘でんす……ブランデーの噴水、蚊の涙ほどにも思はん。和八受合ひます。……さあ、御坊、さあ、御坊。」

二〇

「や、見事なもんや、豪い。」

和八は旅僧が其の二ツの硝子盃から、ブランドーと水を一息に呷つたのを見て、仰どしく手を拍つた。

「さあ、今一ツ何うや、それ、吉鶴、小美那、二人して一度に酌いだり。」と氣競つて言ふ。旅僧は手を舉げて、

「なか／＼、之は、何うして容易なものではございません。最う重ねては頂きますまい。」

「お岸の酌でなうてはあかんか。」と小鼻の邊に鞭を寄せて、

「お久類、何うしたんや、遅い。急いで逢ひましょ、云ふて遣らんか。」

「承知してやはけな、直きに來やはりますえ。」

「一向、當に成らんが、まあ可え。餘り遅いと、私が又鐘を鳴らすよつて、然う思ふて貰ひますわ。」

然したら御坊、待つ間が花や、……私が看するよつて、もう一ツ飲んで貰ひます……さて、

御さかなには何よけむ——とある……えへむい、

と咳拂して、素直に座を構へ、神妙に膝に手を支く。

吉鶴が、繕つて、

「何ぞお聞かせやす。」

「心意氣でおすやろな。」と小美那と云ふのが三味線を取つた。

「何ぞとは何云ふのや。之を、と望め。何なと聞かせる。何ぢや、望め。」

「さあ、何やろな。」

と仲居と小美那と兩方へ目遣ひして、成りたけ難儀せまいもの、と吉鶴は吸ひかけた細い煙管を火鉢の椽へソツと掛けて、うっかり考へると、舞妓が傍から、黙つて其の雁首の吸殻を火箸で穿る。

「お客はんのお肴やよつて、彼方の可いものをな。」と仲居が捌く。

「御坊はん、お望みやすえ。」

と小美那が、半帕で三味線の棹を一ツ扱いて見返つた。

「望むと申して、私など……何でも結構でございます。」

「旅を歩行く坊はんちや、腹に堪るものが可い、」

一つ憎い口を利きながら、

「實の澤山ある淨瑠璃何うやい、可えか、可えか。——然らば此の處、艶姿女舞衣、語りこ

する太夫竹本和八、はゝゝはゝゝ、三味線弾きのやうやな。えゝと、竹本和太夫、はまゆふと聞

こえるわい。志摩國の名物館の乾物ぢや、之を御坊へ看かい。」

「お師匠はん、見臺。」

舞妓が其處へ、紫の天鵝絨の脇息を寄せて据ゑた。

「お照らし、お照らし……」

と和八の呼ばるゝ聲に、燭臺が二挺ひたりと直る。

其時、舞扇を押取つて、しやくひ上げるやうに掌を一つボンと拍ち、据首を揉み上げながら、

「……今頃は半七さん……」

「よう／＼、」と聲がかゝる。

「何處に何うして御座らうやら、今更返らぬ事ながら、私と云ふものないならば、舅御さまも

おつうにめんじ、……去年の秋の煩らひに寧ろ死んで了うたら、かうした歎はあるまいもの、」

眞赤に成つて、はたと脇息に額を當てゝ突臥すかと思ふと、仰向に反るが疾いか、ぐつたり

と成つて、左右へ、べた／＼と腰を崩す。……忽ちしやつきり張つて、ぐいと肩を聳かす、平

手で頬邊をひたりと敲く。扇子拍子をストンと外づして、見臺はづれの疊を打つやら、ぶるぶ

るわな／＼と震ひ上つて、調子づいて乗出す發奮みに、じり／＼と蠟燭で小鬚のはづれの、少

しちゞれたのをチャリ、と焼くやら……其の毛を鷲掴みに我手で捲る、節と一緒に引張り落し

て、わつと泣く、……いや七顛八倒見て居られず、一座諸聲に哄と笑つた。

「何が可笑しい、小兒め、笑ふたな。」

と舞妓を一人突飛ばす。あ、と云ふ間もなく、ばつたり倒れる。

二一

「あれ、」

と驚く、最う一人の舞妓の耳元を、返す平手でびしりと當てた。

花かと思ふ蠅の紅を散して、美しく輝く中に、名所に描いた霞のやう、すらくくと見臺さがりに、袖を連ねて綾に錦を織交せた、白粉の香もほんのりと紫立つて籠つた處へ、蛇の聲が風に變つて、哄と黒雲を捲落せば、座敷は宛然小袖幕の吹亂された風情である。

「此の聾めら、」

と竹本和太夫、濡れた唇に白泡を嚙散らして、

「何奴の耳も木耳か。やい、淨瑠璃は泣くもんぢや。……あはく、笑ふ奴が何處にある、怪體な！何さらす。」

で、睨め着けたが、酔ひしれて目は開かず、眦を裂けるばかり、びくくくと戦かせて、青筋

を額に畝らす、……酒の上なり、洒落に怒つた様子で無いから、顔を合はせて、坐も灯も白け返つた。

直ぐに見臺を刎返す。慌て、仲居が燭臺を後へ引いた。

和八は膝を突掛けて、

「何うや、和尚、え、道心坊、淨瑠璃は笑ふものか、——其も茶利場や無いわい、三の切の愁歎場語るんや。何うや、和尚。」

「はい、之は泣く處でございますな。」

「泣く處？屹とな。」

「然やう。」

「泣いてくれ、泣く處なら泣いて貰ひます。わつと一つ頼まうか。さあ泣け、え、泣いてくれ！」

と立身上りに、其處に引轉覆つた脇息を引擱んで、ドンと疊に打附ける、と煽りに燭臺が一つ、

はつと消える。

「ほうい、おうい、」と旅僧は悲しげな聲を揚げた。

一同顔を見合はせた。

お岸が其處へ、裳を曳いて、すつと出た。

「ちやツとな、襖の背後で聞いて居た、吉鶴はん、姉はん、お泣きやすや、」

と前袂を合はせながら、立姿を消すやうに、旅僧にひたと寄つて座に着くと、

「私も泣くえ。」

と袂を取つて、顔に當てる、と顔の月が隠れて、未濃に藤の袖が落ちる。

言合はたせやうに舞妓まで、齊しく面を蔽ふたのである。

時に赤前垂の諸膝支いて、仲居は消えた蠟燭に、燭臺の灯を移したが、一同、差俯向いた黒髪かみの黒さに壓されて、其の手足さへ暗かつた。

御大將御感あり。

「はあ、お岸はん出来た、皆も豪出来ちや、よう、」

と差上げるやうに両手を伸ばして、高笑ひをする、と顔の色が又蒼褪める。

「小兒、酌けや。」

と件のブランデーを呷りつけ、べろくと舌なめすりして、

「さて、御坊、今度は貴公一つ肴をしなさい。何の彼のと言はうより、座敷も陰氣や、踊りが可え。」

ぐらくくと頭を振つて、

「是非所望でんす。」

「千代次はん、松子はん、お立やすや。」

と吉鶴が引取つて、目配せする。

蝶々二つ羽繕。

「措けやい、」

と又怒鳴つて、

「憚りながら、六條の住人や。舞妓の立方茶粥でんす。今更見たい事些ともないわい。」

「然やよつてお客はんにお見せやすな。」と仲居が言ふ。

「別の話や、そりや、」

と眞面目くさつて、膝を叩き、

「私に肴して貰はう言うとるんや。和八へ振舞のため、御坊に踊を所望するでんす……喜選やつたら正のものやが、何やろと段ないでんす。目なと足なり、そりや、くるくるとまはしたり、舞ふたり、踊つたり、さあ御坊、御坊。」

と後上りに、喚いたり。

二二

ものに逆らはぬ旅僧も、之には、もつけな顔をして、

「泣けとおつしやるには泣きもしました。が、舞、踊などゝは何うも……一向不調法でござい
ます。」

「不調法段ない。うゝむ、些とも上手なのは見たうない、平に所望でんす……御坊、さあ、小
美那何なと弾かんかい。これ弾かんかい。」

で向直つて話掛ける、血相が——件の蒼白いので、小美那はおろくししながら、

「然やかて、何を弾いたら可いのんどすやる。」

と困つた顔して眉を擡める。

「坊はんに聞いたら可えが、踊手に聞かいて誰が知るもんぢや……さあ弾かんかい。 えゝ、
埒の明かん、チョツ腕ツ節を挫ぎ折るぞ。」

「あゝ、痛、貴下はん。」

と膝を煽つて、べつたりと三味線ごと、仲居の胸に倒れかゝつて、小美那は泣聲。

屹と成つて、お岸が襟を掻合はせた時、旅僧は正面へ向直つて、づいと出た。

「踊りませう。」

「豪う濟まん事どすな。」

と氣の毒らしい流眇で、吉鶴が三味線を代つて取つた。

「何を弾くのどすえ。」

「え、何も心得はしませんから、構はず御勝手にお弾き下さい。」

「然したら、若旦那、お好みやすえ。」と仲居が言ふ。

「然よぢや。」

忽ち機嫌が直つて。

「坊さん忍ぶにや暗夜がよい、……でもあるまいかい。……わしが在所の替歌よかる、東西東西！ 銷踊りのはじまりぢやい、と拍子に掛る。

チン、トン、シャン、と弾出す。揃つて唄ふ。

空が曇れば、雪がちら〜と、

これぢや堪らぬ熱燗で、

飲めば其處らへ打倒れ、トンと、

色氣も戀氣もないわいな、

起してやんな、エ、く、

旅僧は、すつくと立つて、大跨に廻りながら、もさりと腕を出す、のさりと歩行く。差す手引く手に大なる影。荒海の障子の繪から、づばと拔出したものゝ如く、魔が魅すやうで、可笑いよりは凄かつた。

氣の毒さと笑止さに、女たちは顔を背けた。

一人、お岸が熟と目も放さないで視めたのである。

「いや、づんべら、づんべら。」

餘り曲がないと思つたか、旅僧は、差す手の腕の處々へ、陀羅尼音の調子を取つて、
「いや、づんべら、づんべら。」

シヤンと澄む。

「喝乎々々！」

眼を細く、大口を開いて、高笑ひで、和八ぐツと反つて、

「豪ら出来ぢや。」

と讃めるが早いか、突のめるやうに脇息にドンと凭ると、

「あははは。」と兩の肩を揺り上げつゝ、ひよいと、顔を擡けて、けろりとして左右を胸はし、

「之は誰方もよくおいで。はあ。綺麗なことぢや。」

と座り直つて、

「時に、御坊よう舞うておくれなかつた。六條上る所の住人、和八、禮をします。屹とお禮を

しますわ。」

「禮なぞと、飛んだ事を……」

言はせもあへず、押冠せて、

「大學に曰く、謝するに禮ありでんす……お望なされ、え、御坊。」

「然やうなら、」

其のまゝ正面に座を正して、

「種々御馳走に成りました、……不思議の御縁で。しかし時も経りました。之で失禮がいたし

たうございます。手前、何よりも其が望み、誰方もおとりなしを願ひます。」

と居並んだ女たちを、……分けてお岸の顔を見た。

二三

爾時、和八がまだ答へぬのに、お岸が何事も意を得た様子で、更まつて、

「一寸お待ちやす。千茂登でも飲つたはけ、御酒は最う御迷惑やろ思ふたよつて、私、今此處

へ来る時にな、然う言ふて、釜を掛けて貰ふたのんえ。内には、圍があるよつて、下階へ行て、

茶々一つ上げまつせ。見苦しいけど、私がつてますよつて、よばれて行ておくれやす……其に、

晩う成つた、お泊りやつたら、支度させるはけ、此家へやすんでおくれやすえ。」
と一寸々々和八の方に目遣ひしながら、氣を兼ねた状も見えず、我が事するらしく澄まして言ふのである。

旅僧は一議に及ばず、

「いや、宿の御心配は兎に角、何より結構な、其のお茶を頂いて参りませう。」
「御免がすや。」

と和八に言つて、お岸は早や立ちに懸る。

前刻から、脇息にぐたりと凭れて、然も疲れたらしく目を眠つて居た和八が、上目づかひで雙方をじろりと視て、

「待ちなされ、御坊、お別れとありや餞別する。やあ、女ども硯箱を之へ持て、と和八大將お聲懸りぢや。」
と自分で言ふ。

蒔繪したのが造柵の上にあつた。

「お岸はん、其の檜笠一寸貸した。」

早や座を立つゝもりで、床の間に差置いた、風呂敷包と、其の檜笠は、お岸が既に兩方とも袖に取つて居たのである。

「どないしやはります。」と少し猶豫ふ。

「まあ、可えが、」

「然やかてな。」

旅僧が聲を懸けて、

「お構ひなう、御随意に。」

和八が取つて、バツと脇息の蓋に置くと、引掬ふやうに含ませた墨べつたり、和蘭陀の蜥蜴の書體で、Husband of Okishiと廻しがきにのたくらせた。

目の縁に皺を刻んで、嘲る如く、

「何うや！彌次郎兵衛所持之、とも何とも書ぬ。英語や、こりや、と突進らしたを指で指して、

「お岸の亭主……どないなもんや。」

「お、嬉し。」

とお岸は然り氣なく、風呂敷包を胸に當てた。

和八の目はどんより光つた。

「其を被つて、西へなと東へなと勝手にとつと去になされ。」

慥くても僧は、氣色ばんだ風情もなく、

「地獄、極樂、いづれへか参ります。」と言ひながら、檜笠より、お岸が手にした、其の包にのみ……何故か目も放さず、

「誰方もお先へ。」と言ふ。

「やあ、待つたり、御坊。」

とまだ不足か、呼留めて、

「大學に曰く……謝するに禮ありぢや、知己に成つた記念といたいて、何か欲しい。いゝや、頭陀袋の中のものなど、ほつても要らぬ。何なりと御坊が一筆望みでんす。唐紙か、絹か、御意次第取寄せるによつて、お認めあれかしと存じ候ぢや、如何に候。」

「之は……出来さへしますと、何よりお易い事でございますが、お恥かしが不調法で、」

「其の不調法所望でんす。」と又こだわりかける。

「同じ事でも、踊の處はくるく廻つて済みましたが、何か認めるやうにおつしやつては、逆紙斗も打てません、平に御勘辨に預りたい。」

「其處を願ふのが所望でんす……分らんない！」

と又喚く。

お岸ばかりか、吉鶴、小美那、その他も、齊しく頼むやうに目遣ひした。

「止むを得ません、強つての事だと……手前認めるものがたつた一つ、其でも差支へございま

せんか。」

二四

些と其の言葉が意氣込んで聞こえたので、和八は氣を打たれた顔色して、

「はあ、何とある？」

「否、別に申出すほどの事もありません、身分からお念佛を認めませう、南無阿彌陀佛と、其だけなら存じて居ります。」

和八は黙つて、肩を一つ嘗めた。

「そりや無茶や、こないした酒の席、安養淨土其のまゝや言ふた處で、こゝで念佛をかゝれては何うも成りまへんで、

と眞面目に成つて、

「可うおます、かゝすと段ない。」と左右へ手を掉る。

フトお岸が、忘れて取落したかと、件の風呂敷包を下に置いた。蠟燭の眞がスツと眞直に立つて、座敷が寂寞した折から、疊に觸つた其の包の音は、づしりと響いて重かつた。……旅僧は屹と視た。

お岸が打傾いて一寸案ずるやうにしたが、

「あの、然やつたらな、私が書いて貰ひますせ。御坊はん、な。」

「お易い事です。」

「其を、書きやはるに、一寸な、何にかて、大事おへんか。」

とうるみのある目をぱつちり睜く。

「些とも差支へありません。」……と、和八で無い、此の女の言出す事、仔細はあるまい、と旅僧は信じたらしい。

言ふ下に、帶留がパチンと鳴つた、脊負上が、胸に弛むと思ふと、錦の帯の虹なす中から、するりと裾模様の腰が這る……ト燃立つやうな緋鹿子の扱帯を解いて、對の小袖の一枚が、は

らりと其處に裏を見せれば、友染の下透く、皓き、膚を取つて映したやうな、雪艶やかな白羽二重。

袿搔寄せて腰に結ふ、紅を引蔽ひ、目まじろがぬ色きつぱりと、

「御坊はん、大事なかつたら、此處へな、認めておくれやすえ。」

づゝと直つて、筆を取つた、法衣の袖も凛々しく見えた。

「南無阿彌陀佛、可んですな。」

「はあ、何うぞ。」

と見詰めて言ふ。

墨の色鮮麗に、

「南」と其の一字。

「無」とお岸が次の文字の、白羽二重に映るのを見ながら唱うる。

「阿」

「彌、……」

と云ふ時、胸をそいで、薄着の肩がわなくと震へた、お岸は窘むやうに身を細めて、

「おゝ、寒、着るもの貸しておくれやす。」と膝を崩して衝と動くと、片手を支いた旅僧の左の袖を被いだのである。蠟燭の灯が揺めいた。

座は静り返つた。

雲を分けたる顔で、お岸は墨染の法衣の脇から、

「何やら云ふ歌があつたえな。大谷の墓に居やはる、私の友だちが知つてどした。……こないした處をな、何云ふたえな、……佗びぬれば、昔の衣は唯一重……」

「貸さねば疎し、いざ二人寝む。」……と旅僧はあとの句を口誦みながら唱名の傍らへ——夜行坊——と名を署しぬ。

突然、燭臺がばつたり倒れる。と紅の守宮の如く、灯はちよろりと聲を這つた。殺氣、蜘蛛の巢の如く颯と掛つて、きやつと叫ぶ。あれえと泣く。

の巢の如く颯と掛つて、きやつと叫ぶ。あれえと泣く。

吉鶴の髻を搦んで、横のめしに引倒すと、其の手で、仲居の胸を仰状に突拂つて、躍上りざまに、和八の脛は、禪もあらはに、小美那の願を蹴らうとした。

「わやゝな。」と落着いた聲で言ふと、お岸は其の解いた扱帯をスーと引きつゝ、すらりと立つて、はつ、と抱く、……胸へかけて、和八の両手を背後に引くと、綿の如く、くなく、と成つて廻はすまゝに、ぐる／＼巻きに、きり／＼と結むだ。

緋扱帯に巻かれながら、和八の體は、朽木の如く、諸脚を張つて仰向に撐。

二五

「願と云つて、何う云う事です……何も御承知の通りの私が、お引受け申すと云つた處で、たかど知れたものですが、しかし出来るほどの事だつたら、阿女のために、決してどんな事でも厭ひません。

慥う云うのさへ、推の強いやうだけれど、まあ、話して御覽なさい、言つて見て下さい。」

と言ふ、旅の法師の果敢なけな其の姿ながら、聲も調子も頼母しい。

お岸の帯には、半襟の色より濃い紫の袷紗があつた。

唯二人、數寄屋の内に對向ひ、で川向ひなる鼓の遠音が、千鳥など鈴あるべし、松風の釜にチリ／＼と幽に通ふ。

「言ふて見まつせ。」

とお岸は思入つた眸の色、熟と旅僧を瞻つた。

「承はりませう。」

「でもな、貴下はん、お聞きやしたら、屹と、吃驚しやはりますやろ。」

「吃驚する？」

お岸の取詰めた顔色に、故と豊かに笑を含み、

「いや／＼、……まさか坊主首欲いでもあるまいと思ふ。お望を叶へられるか、どうか、其は別だが、大概の事には驚きません、構はずおつしやい。」

「えらう、御迷惑な事どすけれどな、あのな、貴下、前刻、祇園はんで見やはつた、あの嬰兒はんな、」

「あの嬰兒はんの父はんに成つておくれやす。」

と顔を視詰めたまゝで言つた。

僧は默然としたのである。

「あ、貴下、然やかて、何の厚面皮しい！私を女房はんにしてやないのンえ。嬰兒はんをな、其のな、風呂敷包みの中へなと入れて、持つて去んで、養うて、あめなと露なと大事おへん、養うておくれやす、え。」

と目まじろぎもしないで言ふ……其の風呂敷包は、膝に引着けて居た。而して和八が樂がきした檜笠は、中庭の縁前に俯伏せにしたのが、灯を入れた石燈籠に朧に見えた。

眉秀でたる面を上げ、

「申戯ではあるまい。」

「真剣どすせいな。」

「風呂敷包みに入れて行け、とまで言はれるからは、何も更めてお話しをするまでもないが、可愛い兒を阿女、何うするつもりだ。山深く野が廣ければ、雨露を凌ぐに辻堂もない。目下は素より、一生自分でも行衛の知れない行脚坊主に、兒をまかして何うします。行末何にしようと思ふんです。」

「何になろとな、どないしやうなと、貴下はんに頼んだら、祇園の藝妓の兒で居るよりは増ですせ。兒にしやはるが厭でしたら、お弟子にしてやつておくれやす。」

「いや、其は尙ほむづかしい、此通り、頭に伸びた毛も無いが、阿女、私を買被つて居やしな

いか。
打明けて言ひますが、實は身體だつて狼同然、法衣は唯着たどかり、何一つ修業をしたのぢやないのだから。」

と冷やかに、且つ自から嘲けるやうに言ふ。

お岸は身動きもせず端然として、

「何も教へずと大事おへん。大きう成つたら、貴下の通りにしてやつておくれやす。」

「行脚坊主にしやうと云ふお心かい。」

「坊はんでもな、神主はんでもな、何やかて大事おへん。

貴下の年にならはず、今月の今日やつたら、東大谷の門外へ通りかゝるやうにしてやつておくれやす。」

「私は取つて三ふだ。」

ト其の兒が同じ年に成つた時、今月の今日、東大谷、あの、大谷の門外へ通りかゝらせてくれと言ふ。」

「あい、」

「而して……」

「然やつてな、舞妓はんが二人で、袖ひいて留めやはつたら、手に持つた笠かぶつて、莞爾してな、願を櫛らしておくれやす。」

其處へ行てな、祇園の藝妓や云うて手を支いて頼んだら、連立つて歸つてな、相乗で、可うおすか。

千茂登の行て、千茂登の内ですしむかひに……」

と言ひかけてほろりとする。

僧は腕を拱いた。

二六

「所帯持つたやうにして、二人して御飯たべておくれやす……歸途には手を曳いて竹村橋を渡るのえ。」

お客はんがな、惜い金子遣やはる、むしやくしやの遣場がないよつて、酒の勢借りて暴な事

言やはつたらな、

と鬢暗く差俯向き、

「成らん處辛抱して、淨瑠璃聞いて泣いておくれやす、……何も知らはらいでも、立舞ふとな、
づんべらづんべら云ふて踊つておくれやすや。真に濟まん事ですが、私の我まゝよう聞かして、
つき合ふておくれやした、……泣きたいほど、嬉しおしたえ。

矢張りな、私見たやうな女子をな、喜こばせておくれやすや。」

と旅僧にも云ふのが、其處に嬰兒が居て、遺言をするやうに、可哀に、且つ云ふべからざる威嚴を帯びて聞こえたのである。

旅僧は其の嬰兒を搔抱く如く、手を解いて胸を開いた。

「お引受け申さう。」

「え、」

「確に私が預ります。」

「眞個にどつか。」

「勿論！」

と顔を見合はせた。

「お、」とお岸が、崩るゝやうに、爐の縁取つて、身を寄せて、

「然どしたらな、……欲を云うやうどすけれど、……思ふ人に添はれいで生とる効がないはけ
に、死なう死なう思ふけれども、骸骨に成ると、目々や口へ蜘蛛が集るやろ思ふて、其が可厭
らして、死ぬ事出来いで泣いて居る女子に遇はつたら、骨はな、海へ行て龍宮の珠に成る云
うて、安心をさせる人はんな、屹と、育てゝ遣つておくれやすや。私はな……思ひ置く事何
にもない……」

と露の晃めく目元の微笑、唇の色は、蒼かつた。

「而して、」

「……………」

「お岸さん……阿女は何うする。」

「御坊はん……死なう思ふばかりやない、生きて居られしへんえ。もしお聞きやす、……あのな……」

前刻、竹村橋で逢ふた女子のお菰がな、私に言はれた事、口惜い云うて、疎水の瀧へ身を投けた。」

と言も投けて、断念めたやうに言つた。其は事實であつた。

あの時、髪かみの亂みだれた、藍色あいらの顔かほした婦まんの手に、旅僧たびそうが白く光ひかる一掌ひとしらくの露つゆを恵めぐんで、通とほると見ると、醉心すいしん地に氣きの立たつたお岸あしが何なんと思おもつたか、つかくと引返ひりかして、流盼ながしめに熟じつと視みながら、

「何や、」
と云つて頭あたまから肩かた冷ひやく、

「あんた、足腰あしこしは立たつやないか、橋はしに座すわつて、錢貫ぜにぐらうて何なにしやはる。……見みなはれ、あんたが、

膝ひざも腹はらも見みえるやうな襦ほろ袢ろを引摺ひきずつて、地板ぢびたに額ひたいつけてやはる間に、綾錦あやにしきをば不ふ断だんに着きてな、酒さけの機嫌きげんを川風かわかぜにふらふらと男おとこと手てを曳ひいて通とほる女子よめがあるえ。しゆみてやなあ。何なんや、確乎たしかしなはれ……御亭主ごていしゆに棄すてられても小兒こども養やしなうてやが煩わづらう言いやほる。貞女ていぢよやら、賢女けんぢよやら知らんけれど、そないな事ことして居ゐると、藝妓げいこにならはれ、此この川かはで垢落あかおいて來きてやつたら、私わたくしが廻まわいて上げまつせ、意氣地いきぢがないな。」

とせき込むばかり、早調子はやてうしに、何なん爲なぜか、あせつて口惜くやししさうに云いつた。

言いふものよりは言いはれた方はうが、蟲むしの鳴なく、息いきの詰つまる、遙かたかな聲こゑで、

「口惜くやしい、口惜くやしい。」

と絞しぼるやうに、黒髪くろかみを戦おのかせて忍しのび音ねに泣ないて云いつた。

「口惜くやししかつたらお死しにやす、乞食こじきするより増ましどすせ！」

と言い棄すて、カランと駒下駄こまげの音おとを響ひびかせた。

旅僧たびそうは爾時そのとき何なんも言いはなかつた。

慙くて、朧夜にひらくくと、舞妓の帯の金襴の蝶が舞ふ、大和橋を渡つたのである。

二七

爰に言添へる事がある。

欄干に凍りついて、黒髪はたゞ銅線の如く、すつくと立竪んだ其の婦を残して、旅僧とお岸の姿が夜の柳にかくれる、と間も無かつた。

誰も通らぬ竹村橋を、齊しく先斗町の方から、ほくく一人、ほやけた靴の音で、踏んで来たのは、西石垣の床屋に居候。耳の垢取健沈君。

袖を川風に、ひらくくと、

「ばあく、……と何か獨言を、……唄かも知れぬ、……饒舌り饒舌り渡つて来た。

夜はまだ早いが、店の親方が、鼻眼鏡で、盆栽の塵を吹くほどの床屋であるから、職人の耳の垢が、宵出などは忪むに足らぬ。

渠は此の界限に久しい顔では無い。近頃から、緋袴のぼつとした暖簾と一緒に、件の店へ顯はれたものだけれども、風采で誰でも目に着く……

特に、日が暮れて手さへすくと、毎夜の如く、先斗町、祇園へは入浸りの軒素見。

動物園から信夫翁が流れて来たやうに、をかしがつて、珍らしがつて、舞妓などは行歸りに、きやつくと玩弄にからかふ。

ト人の言ふことはよく分る。洒落を言つてもニヤリと聞分けるほどだけれども、唐人一向な唐人で、唯ばあく。

「ばあ、ばあ、」と其の何か云つて、今夜も之から、素見の道中。

欄干にイんだ。件の蒼い婦を、よくも見定めないで、

「ばあ、ばあ。」

と變な辨髪の色目づかひで、前を通つて、最う渡果てる處で、一寸振り返つて見たトタンに、蓬の如き髪の中に、凄まじい目の色して、鐵漿を含んだ、上下の唇白く、ニヤリともの凄く笑

つたので、

「わッ」と怯えて一目散、燕人張飛に睨まれた、魏の國の陣笠の如く、新地の暗へ遁込んだ。婦が、疎水の瀧へ身を投じたのは、それから幾程も無かつたのである。藝妓に辱められたゝめに、口惜しさの餘り溺死したと云ふ風説は、早や人々の口から、祇園の其處此處へ傳はつた。

「丁どな、私、お容はんと對になるのが可厭やはけ、戻つて、衣服をば着換へてな、……屋方を出よう思ふたら、其の風説しとのどす……死骸捜しに巡查はんやら出てやはる最中や。疎水で人の死なはるのは、覺悟やら、過失やら、毎々の事どすよつて、誰も慌てやはらん。それにな、女子やけれど、物貰ひたら云ふよつてに、此家の二階など、誰もまだ知らはらんえ。

けどな私聞いて、ドキリとした。

何や云うて、竹村橋で惡體したから、今思ふとよう分らんえ、夢のやうどつせ。……晝間、

大谷はんの山門で、草刈の子に、お錢持たいたのをば、汚れる云うて、拂ひ退けやはつた女子の顔に肖て居たよつてな。かうした稼業するはけに、家やら、藏やら、何うやら云ふて、私をば怨んで居やはる女子もあると聞いとるはけな、……むらくとして氣が上つて、前後が分らんえ。

人一人死ないたによつて、もう生きて居られやへんのンえな。

そればかりやおへん。今日もな、實は、大谷はんのお墓所で死なう思ふて行つたんどすせ。けどな、餘りむさい事坊はんが言やはるよつて、骸骨が悲しうて死にをくれた。

貴下はんが、あないに言ふておくれやす……唯た一ツ心がりの嬰兒はんも連れて行ておくれやす云ふよつて、私な、慙うして居ても、月が見える。……あゝ、影が射す……」

と半ば開いたる、白銀を以て張れるが如き小縁前、恰も鶯の映る風情に、白玉椿の花の影の宿るを視た。

機會を思へ?

精舎の鐘こそ響かずとも、冷たき夜半を何事ぞ！

「もんくくく、わんくく、ぐわんくくく、」

どし、どした、づしん、とものゝ音、釣鐘の和八が、眞上の二階で。

二八

故とであらう……其とも酒の酔に堪へなかつたか、這奴、二階の縁へ出たと思ふと、かつきと欄干に凭れた音して、

「けい、」

と喚くや、廂はづれに、したゝかにこそ吐いたりけれ。飛石掛けて、燈籠の苔蒸す根へ、蒼い霜が粘土の如く落ちて、胸吐くばかりの酸い臭が券とする。

お岸は思定めた、其の白蠟に美しく刻んだやうな偉して、陣を返して見遣つたが、
「大事な席へ、何するえな、むさや……」

と旅僧を一寸見て、極り悪さうに恥らう色して、衝と立つと、花の影かと思える、月明りの小縁へ出て、袖垣の此方に縁も深い、石の手水鉢の柄杓を取つて、月に練絹を灌いで投げた。

汚穢を拭ひ去らうとしたのである。

水よ、それ湯よと、二階で騒ぐのが手に取るやう。數寄屋は、慥くても、二人の影、月、松の風。

「あゝ、清める水がたらんしなあ、」

水は早や汲果てつ。お岸は、口惜しさうに、屹と云つたが、帯の黄金の水仙漬々しく、雪の小腕白く揚つて、竹の柄杓の柄を高く、手水鉢をハタと打つた。

響に應じて、玉を重ねた、水は、さらりと湧いたのである。

ト見ると、石の縁を蒼く溢れて、白銀の糸光々と、袖垣の袖に縋取るやう、音を立つゝ、颯と落ちて、飛石の上を洗ひながら、ハツに走つて、母屋へ通ふ、橋がよりを、潺々として流れ流るゝ。

知らずや、今は世になけれど、祇園に聞こえた、此の揚屋の老主人、宗如と號して、斯道の達人と呼ばれたのが、腮に長き雪す髯に、世の中から隠れ住んで、市に大隠の餘生を清らかに送つた、其の人の、靈廟の如き數寄屋である。

樓の一部屋を造り設けた、二階は酒の池なれば、恁らむ時の、豫て、たしなみがあつたと見える。

舞も唄も然る事ながら、お岸は分けて、逝きし宗如が茶道に於ける、祕藏の弟子であつたと聞く。

お岸は思はず、柄杓を落して、恍惚と視めて居た。が、見る見る水は溢れ溢れて、飛石は水晶の面を沈め、石燈籠は琅玕の影を落して、袖垣に、鴨川の月の水音通へる時。

「あゝ、龍宮から迎ひに來たえ、貴下、お見やすや。」と莞爾した。

「縛つたぞ、祇園のお岸に緋の手練でぐるぐると巻かれた、色男をお目に懸ける。さあ、京洛中、寄つて集つて和八を拜め！」

と引くりかへす段梯子、大亂れに成つた和八の姿が、通魔に緋色の蛇の擲んだ狀して、橋よりを衝と抜けると、續いて四五人、藝妓舞妓が追掛ける。

内證の方で、わつと人聲。

早や戸外を、大和橋の方へ、懸想文賣つた聲のやうに、

「祇園のお岸に縛られた、色男拜まんか、拜まんか、拜まんか。」

と喚いて行く。

呼吸せいてお久類が來て、小縁前へ膝を支いたが、目も、きよとついて、庭の水も氣が着かず……口をきくより、せい／＼云ふ。

縁の柱にトンと凭れて、

「何うしやはつた。」

「なんやかてなあ、刻前縛つておくれやしたで、漸つと静まつてな、仰向けに寢て居やはつて、水を吞まう言やほりまつせ。手が出なんだら、何ないにもこぼれて／＼成らんよつて、最うお

しづまりやすや云ふて、吉鶴はんが手繰解かうしやはるけれど、否や、お岸でなうては解いて
 貰はん云ふては、仰向いたり、俯向いたり、くるく廻らはるうちに、えらう、むさい事しや
 はつたんどつせ。其なり又欄干に凭つて、ぐつたりと成らはつたか思ふと、今の騒動や、わや
 ゝがな、貴下はん。跣足で町へ飛出した。どないにかしておくれやす、頼むよつてな。」
 「打棄つてお置きやすえ。」

「然やかて、外聞や。内でもな、お岸はんの名も出る事やよつてと、おかみはんが、こないに
 言うてどすはけえにな。」

「おゝ、辛氣。」

と媚かしく、はらりと小袿。

「お岸はん遅いえ。」

其と見ると、小美那が橋詰で泣聲を揚げる。京洛中へ拜ませる、と鐘は鳴つて出たが、初夜
 過ぎても未だ芝居は勿ねない。さすがに四條へは憚つたらう。和八は大和橋をひた折れに、蹠
 蹠しながら、此の竹村橋の詰へ出た處を、女たちが追縋つて引留めたのであつた。

袂を取つたは、其の小美那と吉鶴ばかりで、舞妓をはじめ少いのは、柩に掛けた幻の花束見
 るやうに、後へ退つて、寂しく美しく遠巻きに巻いて、川風に揺れて居る。

「暴れまふてな、見なはれ。」

「壓へ切れん……何ないかしておくれやす。」

蹴上げる足を避けながら、髪も亂れて二人とも音を絞つた。

「もう、可うおつせ。」

お岸が、すぐに和八の脊へ手を掛けると、齊しく措退いて二人とも吻と息。

お岸は静かに、片手を懐にしたまゝで、

「貴下、優順にして、ちやつとお歸りやすや。」

と唯云ふさへ、遠く別れる聲がした。

「歸らへん……歸らへん。」と肩を揺る、が、飛上る足は釘づけのやうに成つた。

「お岸はん、早う何ないにかおしやすえ……途中で聞いた、今の前刻な、此の疏水に身投があつた、……氣味が悪うて、あれ、音をお聞きやす、引込まれさうにあつて、恐怖うて成らん。」

と背後見らるゝ状に、おどくしながら、小美那は亂れた髪をぞ掻いたる。

和八を片手に壓へたなり、荒馬の轡頭、丁と取つた姿して、

「誰も立合うて居やはらん、……死骸は上つたのんどすかいな。」

「瀧には見えんよつてにな、……下へ流れたと云うて、……見なはれ、あの土手に燈が、それな。」

岸の柳を南下りに、提灯の数が重るのである。

「然やかて、死んだのは此處よよつてに、魂は何處へも行きやへん、可厭いな。……と思出したやうに、——吉鶴が挿櫛を落したとて、橋の上を手探りに透して居たが、——慌しく衝と立

つた。
「姉はん、姉はん。」
と向ふから皆が呼ぶ。
「可いよつて、此處構はんと、去んでおくれやす、大事おへん。私が連れて歸るはけ……大勢やと尙ほいきらはるのんえ。」
成程お岸一人の方が、納の可い事を、豫て皆が心得た。……
「まだ醒めやはらんか、最う去なう、……大嘉へ一度、さあ、お越しやす。」
臈の中に立留つて、橋を見返つた白い顔が二つばかり見えたが、其も消えた。聲音が霞に遠退く。

つた。

「姉はん、姉はん。」

と向ふから皆が呼ぶ。

「可いよつて、此處構はんと、去んでおくれやす、大事おへん。私が連れて歸るはけ……大勢やと尙ほいきらはるのんえ。」

成程お岸一人の方が、納の可い事を、豫て皆が心得た。……

「まだ醒めやはらんか、最う去なう、……大嘉へ一度、さあ、お越しやす。」

臈の中に立留つて、橋を見返つた白い顔が二つばかり見えたが、其も消えた。聲音が霞に遠退く。

「去なん、誰が去なう……京洛中へ拜ませる、やい、放せ。」

と鬼の如く、苦く切なさうに響めた面にも、微笑を湛へて、

「怒つたんやない、お岸はん、可えか、心配ない。恚う、くゝられた處が嬉しいよつて、洛中へ

見せびらかすぢや。うんや、拜ませる。」とばたく煽つ。

「辛度やな。」

と、身を曲つたが、其の後手に、和八を結えた緋扱帯の端をぐいと取る。と、他愛なく、ぐにやりとし、ひよろつく足を掬はれて、どざりと尻餅を支く處を、其のまゝ、欄干の柱にきりきりと引結んだ。

「あ、色男、と制札打てや。」

で、酒を吹いて、ガツクリ投首。

膝も脛も露顯な胡坐を、小褌りゝしく熟と視て、

「あゝ、聞わけのない方や……つらい思ひで、好いた人に情立てる女子やつたら、あはれや云ふて、かばいでもな、風が吹いても散る花を、無理して手折るものやない！……けどな、私を思ふてくれはるを、憎らしとは思はんよつてな、案ずるのどつせ、そないに身を崩して何うしやはる、酔をさましておくれやす。」

としめやかに云ふ聲が曇つた。

三〇

「天晴なお姿だ。」

來懸つた旅僧は興がる顔して、其處に挫けた、扱帯に捲かれた和八を見ながら、眸を返して、橋に裳の落ちたも忘れて、兩手を白く欄干に、じつと、鴨川に差俯向いたお岸を見た。

「一寸……いづれは明早朝、更めて出て話します……故とらしいが、此の體だから、揚屋へ泊れとあつたが、其は遠慮しました。」

確に……之なりでお別れはせんが、しかし、あの兒はお預り申すにしても、まだ、誕生前の嬰兒だ。せめて其の口から、阿女をお母さんと言ふのを聞くまで、何事も心静かにお待ちなさい。

肩に置く手を密と揺ると、揺られながら、頭を振つた。

「む、何は兎に角、夜の明けるまで、
と一人で頷くやうに云つて、

「それは、しかし餘りに見える……お知己の効にお顔だけ包んで行く、」

引提けた、件の Husband of Okishi とかいた檜笠を取つて、和八の胸をかけて斜に置くと、
潜り込むやうに顔を入れた。

立去兼ねて、旅僧は、すつくと立つ。

音を早めて聞こゆるは、風添ふ疏水の瀧である。

笠から、ひよつこりと顔を出して、

「御坊、卷蕘はないかい、お岸はん、一寸喫ましてんか。」

「ばあ、ばあ、ばあ。」

と鼻唄で、垢取りの健沈、素見から立歸る。

きよろくと、三人立の押繪のやうな、橋の臈を詢しながら、擦違はうとて、

「ばあ、ばあ。」

「あ、南京はん」とお岸が、衝と顔を上げて聲を懸けた。

袖を合はせて、健沈、恭しく一揖なし、

「ばあ、ばあ。」

「貴下な、頼まれておくれやす……知つてどしえな。薬湯の私の屋方へ行てな、岸が待つとる
はけ云うて、乳母にな、嬰兒はんを抱いて来るやうに云うておくれやす。表へ廻つたら世話や
よつて、裏口は直き其處や。木戸から庭へお入りやす、えらい濟まんけど、な、可いかえ。」

「ばあ、ばあ、」と云ふより早く、心中立てに、ほかく駈出す。

怨めしさうに、

「御坊はん、卑怯なえ。」

「いや、關東ものは卑怯でない、此の場から抱いて歸る。」
待つ間も無かつた。

乳母は背後に附いたらう……唐の手に尙ほしほらしい。大和撫子のむつぎの色、月の向ふへ薄紅が、高く捧げられて見えた時、お岸は其時まで、静と居た。あの、藍色の姉のゐんだ處を動いて、するくと瀧ある方へ渡り返すを、兒を迎ふる、と思ひながら、油断せず、じりじりと旅僧は引添ふた。

「やあ！了つた。」

疏水の瀧へ、藤の長房、あはれ引留めた手がこつて、嬌娜な其の姿は宙に、袂の端のみ捉へたのである。水も惜むか、吹返す、冷い風にすらりと留まつた。

東山の月、朧にして、ひとり、清水の空、澄渡り、瀧の面は氣勢に凝つて、怪しき星の映るが見ゆ。

協明は、はらくと、紅を解いて雪を散らす。

「見届けた、骨は玉だ。」

と呻く時、水煙がぱつと散つた。水晶の簾の中に、一度すつきりと立姿が浮いて、側に黒髪を

長く沈んだ 二王立の、旅僧の、其の時、眼の光爛々として、
「八丈龍王、其の美人、お頼み申す。」

「馬鹿め、嬰兒を落すな。」

とて、健沈の手から引取つて、記念に残つた、お岸の片袖に、犇と蔽ひ、胸に締めて、顔を見た。

「南京。」

「ばあ、ばあ……、」

「澤山だ、勘助。」

と苦笑ひして、一聲呼ぶ。

「お、」と云つたが、此奴可恐しく傳法なものいひで、
「親方、何でえ、こりや、何うした幕だ。」

「まあ、其處に居る人の扱帯を解け。」

和八は解かれたが、ベツたりと腰を抜いて、其處へ坐つたまゝ動かなかつた。

「一束、千圓ある。」

と旅僧は、懷中から出して和八の膝に差置いた。

「千茂登の内證で、用筆筒から抜いて來た、お岸の名が出ると悪い、貴下からお返し下さい。」

……前刻、英語をお認めに成つたに就いて、私が手で同じ横文字の手紙を書いて、金子を持參するやう、お店へ當てゝ一通、風の變つたのが却つて證文、南京を便にして持たせて遣る手筈、お笑ひあれ、今は夢だ。

勘助、其風呂敷包みに、錐、鋸な、道具が入つた、始末をしる。それから着換へがある、貴様、最う土地に居るな、辨髪の鬘を棄てゝ、坊主に成つて、直ぐにふける。

時に頼みがある、行がけに此の兒を抱いて、今出川……分つたか、此地の大學の教授、あの……博士の處へ行くんだ。

庭を乗越せ、勉強家だから、まだ寝まい。其の内室も、俺が生きて世にある内に、快う宵から寝ん。

以前の信友、黒澤龍介、生命を棄てゝ、御夫婦にお願い申す。此の嬰兒の御養育偏に頼む、龍介が、かくし兒だ、と、よく言へよ！

さあ、大事に抱け。」

と、わなゝく勘助の手に渡した。

「手下の奴等に言づけを頼む、……可惜、都の橋。あゝ、此の月夜に櫻でない、血で汚したら洗へと言へ。」

と云ふより疾く袂を探つて、短銃を軽く握つた。

やがて、店、藏を投けた和八の振舞は、京洛中を驚かした。

竹村橋の東袂へ、山形に米俵を積んで、三寶數百に通貨を装つた、柳が下の建札。——施行。

神纏着、羽織袴など十四五人を働かせて、御大將、祇園の揚屋の屋根より高く、其の米俵の
 頂上に大胡坐。撞木を片手に、緋の扱帯で半鐘を釣つて下けて、幾日もく〜カン〜カン〜
 と囃し立てた。龍介が差置いた、(お岸が夫)の檜笠を横ツちよまで。

そ
ら
解

「其處、其處、おほ、此處ですわ。」

湯島一丁目、中坂の下あたり、湯屋と漬物屋の黄昏の路次の中を、手紙を持ったまゝ、うろくしてゐた少年は、恠う媚めかしい聲を、其處ともわかず懸けられたので、不意を喰つて又きよとつく。

「あれさ、此處ですよ。」と出窓から覗いてゐた、夕顔の宿めいて、ほのかに白いのが引込むと、「何うもお邪魔様。」といふのが聞えて、やがて格子戸をがらりと開けて、駒下駄に裾をひつかけながら、半身を見するや、否や、

「此方よ。」と言つてすつと出たのは、鼻筋の通つた、色のくつきりと白い、目つきは愛嬌があ

つて、肩は稍薄く、生際の曇つたやうな、年紀の頃、二十三四、艶々しい薄でな丸髷、一寸着の縮お召に、南京繻子の襟の懸つた縮入、下着はわづら、江戸紫の半襟、三ツ紋黒縮緬の羽織、するりと肩をすべるのを揺上げながら、

「おゝ寒い。」

と肩をそばめて、

「ほゝゝ。」とわけもなく、三尺に足りない路次を横切るのに小走りで衝と來り、丁ど少年の立つた側の長屋の戸を突然引開けて、構はず、ひらりと敷居を跨いで、框へ片足かけてから、振向いて莞爾して、

「さあ、此方へ、ねえ貴方、此方でせう、殿井の内は此方よ、私の居た處からは其處でせう。あれさ、貴方の立つてゐらつしやる方からは此方で、私の呼んだ方からは其方、家は此方なんだわ。ほゝほゝ、何のこつたね、さあ。」

實にのんきな、餘裕のある、暇なことを、慌しく忙込んでまくしかけて、獨りでをかしがつ

てゐるので、少年は呆氣に取られ、ものをも言はず立つたつ切り。

とばかりあつて、最う内の方で、

「おあがんなさいましたな。」長火鉢の曳出であらう、がた、とつぶ。湯屋で、ざあ、といふ音がして、長屋中寂然、時維明治……年十二月十五日、神田では明神の年の市と謂ふのであつた。

「一寸お上んなさいな。」

少年は不調法と名づくる口付、

「え、此方で可うございます、あの岡君に頼まれて来たんですが……。」

「知つてますわ。」

「手紙を持つてまゐりました。」

「ですからさ、お上んなさいましたね。」と立上つて黒縮緬の後ろ向き、長火鉢の上なる神棚に、ぱつと早付木を摺つて御燈を灯す、燈心をかき立てる人さし指の黄金の指輪まで、戶外から透いて見える、小綺麗に住つたが、三疊と六疊らしい唯二室。

一室は締切つたまゝで、長火鉢を置いたのは、格子戸から横に、取付の其の三疊である。

「さあ。」と此方に向いて、婦人は座蒲團の上に坐る、天鵝絨の一枚向へ直して、

「誰もるやしませんよ。」と言つて又た莞爾した。其の風采、譬へ敵の家なりとも、少年をして辭むこと能はざるものあつて十分也。

「然やうでございますか。」

少年は羽織も着ず、襦衣の上に一枚らしい、それに紺染の兵子帯、品の可い、愛らしいのだけれども見すほらしい。

畏まつて叮嚀に挨拶をすると、早速手紙を出した。

「之に、皆な書いて御座います。」

「はあ、然う。」と少し眞顔になり、手に取つて、俯伏して、——お俊さん——と書いて、肩に——向ふ裏の——と記してあるのをじつと視ながら、

「お敷きなさいましたな。」

二

其のまゝうしろ挿しを抜いて尖を引返し、封じ目の今ついたばかりと思はれるのを、上へ刎ねて、ほろ／＼と解きはじめた。

「今、威勢がよくなりますよ。火が消えさうなんですもの、寒いんですことね。」

口の内で拾ひ讀みをしながら、

「髪結さんとこへ行たものですから、向ふのおかみさんに、留守を頼んどいてね、歸りがけに一寸寄つて、つい油を賣つて。」

といふ獨語でもなし、聞かせるでもなし。

やがて半ば、手から手へ繰りかけて、片はし疊についたと思ふと、眉をひそめて、良無言であるが、少年の目先きに出して、手紙の字を指でさし、事々しく頼み入る形で、

「何、これは」と大分ぞんざい。

少年は片手を膝について、少し乗り出して差覗く。とお俊は火鉢のふちに肱をついたまゝ、手紙と一所に顔を出したので、息も通ふばかり、仙女香の薫ほのめいて、少年は顔を凝めた。蓋し四つの目は共に神棚の燈明で文を見るのである。

指さされた字を、念入りに打覗め、試験の問題を口頭にて解くが如く、極めて慎重に、

「背汗。」

「はい……何よ？」

「背汗……の、これは(至り)と言ふんです。」

「背汗何だつて言ふんですよ。」とばかり清しい目を開いて、少年を瞻つた。

少年はさしうつつむき、

「背に汗が出ますつて。」

「おや、此の寒いのに、風邪でもひいて汗でもしたの？」

「否。」

「何うしたのさ。」

此方は愈々極が悪るさうに、……其處で思ひついたものと見える……

「極りが悪いのです。」

「さう、極りがわるいつて言ふの、其が、あの何でしたつけね。」お俊は不心服らしい顔付で、再び手紙を見た。

「否、然うぢやないのですが。」

少年は困じた風で、

「背汗つてあの何です、岡君が。」

「え。」

「あなたに借拜したものを、今日までといふお約束なんです、それが都合が悪くつて、お返し申すことが出来ませんので、其ですから、背に汗が出ますほど、極が悪くつて、耻しいと言ふんです。」と息つきあへず唾を呑んで、眞面目になつて解釋せり。

お俊はすねたといふ身になり、

「分かりました、呆れたもんだよ。」といったと思ふと、持つてた手紙をかなぐるやうにして、フイとウツちやる、炭取に絡はつて、端が此の主の心か、恐入つてぶる／＼する。少年もぎよつとする。

お俊は火箸をぐいといつて、ごし／＼と灰を掻き、

「法律の先生さんは、だから厭や。極りが悪いなら然う書けばいゝぢやありませんか。御覽なさいなね、くすぶつてゐてさ。心柄だわ。」

鐵瓶がちゆうと音を立て始める、少年は偏に無言。

お俊は更まつた語氣で、

「困るわ、私も、丸帯は、あれ一本しか無いんですからね、それも自分で持つてゐたのなら構はないけれど、つい此頃拵らへて貰つたんで、これが。」

此時一寸親指を出したけれど、頭を垂れた少年には分らなかつた。

「知つてゐるんですからね、其も何だわ、金持の隠居の何かで贅澤な眞似をして居るんなら、小遣が足りないから殺したとでも、何とでも言つてやるんだけど、岡さんも知つてゐるぢやないか。」と半は獨語。

三

「旦那はね、此の間卒業した、若いお医者さんですから、御自分も不自由だし、私も氣に入つた人だから、慥うやつてねえ、女中も使はないでやつてます。」

幾ら、そりや、金子をお使ひなすつたつて、私は家業だつたし、岡さんは御自分の道樂なんだもの、然う言つて見りや、義理はないんだけどもさ、下宿なすつてゐらつしやる御近所に、慥うやつて世帯を持つてから、湯歸りにふいと出つくわして、何うにもならない困つてゐるとお謂ひなさるもんだから、まあ、いつて見りや、旦那の目を盗む譯なんですが、岡さんの服装を見れば服装だし、お氣の毒でならないから、品物で用達つてあげたんです。

屹と今日までには返すと、確かに請合つたんぢやありませんか。

まづ内の(其の旦那をいふ)に慥うしやう、今いつた通りね、贅澤な爺か、お髯さんの旦那でともあるなら、構ひつけないで、お小遣が足りないからと十兩も餘計にねだつて、岡さんの方で出してもらつて、不知を切つてゐりやいゝけれど、能く察してゐてくれる丈けに、心配はさしたくないでせう、え、貴方。

それに今日までと言つたのにもわけがあるんでさあね。

明後日、實は欲しいのよ。

内のと出懸けやうといふんですわ、其もさ、節期師走に香氣らしい、演劇にでも行くなら構ひません。

寄席に一つ遣らないからと、氣の毒がつて下すつて、明後日はお母さんの命日だから、一所にお墓参りをしやうといふ約束なんぢやありませんか。

此方は苦勞をかけ通して、亡くなりましたからね、でもこんなでございますと、あの紋付を

ひつばつて行かうと言ふの、さうすりや帯も欲しいわねえ。

「怒うやつて楽しみに、髪まで結つて来たんだもの……」

と餘程思入つたらしい、お俊は涙ぐまないばかりになり、黙つて願を襟にさし入れたが、フト心付いた様子で少年を打見やれば、これ又た人事ながら、理につんで胸が迫つたか、消え入りたけな風情であつた。

「まあ。」

と紛らして、繕つた笑顔寂しく、

「貴方只今お茶を入れます、何も御存じないのに、飛んだ失禮な、つい何だもんだから、私も弱つたのよ、堪忍して下さいよ。」

「何う致しまして。」としりごみをする。

「まあお茶を入れますから。」

炭取の上に勢のない、詫言を一目見て、茶道具を引寄せて、

「貴方は何ですつて、矢張り岡さんのお故郷ですつて。」

「否違ひます、でもつい隣國です。」

「あゝ、姫路でお出でなさる。ぢや、あの内の松さんと同じ處だよ、可愛らしい名だわね、

姫路、其の所爲でもあるまいけれど、皆さんがお人柄ねえ。何は？さうく岡さんは貴方のお内を下宿をしてゐた事があるんですつてね、今度は岡さんに世話におなりだつて。」

「唯、よく知つてゐらつしやる。」

「よく知つてませう、向の下寄へ行らしつてから、この近所では評判だわ、皆がよく知つてますよ。今も路次を這入ると、方々から覗いたでせう、あれ、眞個だわ。」

(此方は只管に恐縮なるべし。)

「眞個ですよ、皆知つてますわ、此の間角の焼芋屋へお芋を買ひに行つたでせう、彼處のおばさんがさう言つてゐましたとき、貴方が縮緬の帛紗を持つて來なすつたつて、感心だわねえ。」と微笑むで艶麗なものである。